

# 15～17世紀における東南アジア 陶磁器からみた陶磁の日本文化史

堺環濠都市遺跡出土遺物を中心として

The History of Ceramics in Japanese Culture from the Standpoint of  
Southeast Asian Ceramics from the Fifteenth Century to  
the Seventeenth Century: Centering on  
Artifacts from Sakai Kango-toshi Relics

森村健一

はじめに

①研究史

②東南アジア陶磁器の年代観

③輸入産物の容器としての東南アジア陶磁器と  
茶陶として輸入された東南アジア陶磁器

④東南アジア陶磁器の使用法

⑤近世茶の湯スタイルの確立と東南アジア陶磁器と近世陶磁器の確立

## 【論文要旨】

近世陶磁器の萌芽期は1585年前後であり、その確立期は1598～1615年である。この時期、大きな影響を与えたのが、東南アジアの陶磁器である。それらは、首里城跡（1459年大火）、中世大友城下町跡（1586年、島津侵攻大火）、フィリピン・サンティエゴ号沈没船（1600年12月14日）、ビッティ・レウ号沈没船（1613年）を基準資料とし、年代観が与えられる。また、生産窯も近年の発掘調査研究によって判明しつつある。

東南アジア陶磁器には、本来は香花酒、硝石を入れていたと言われるタイ・ノイ川窯系四耳壺、砂糖を入れていたと思われるベトナム・ミースエン・フックティク窯跡の長胴壺等があるが、日本に輸入されると転用された。中でも重要なのは、日本文化の総合である茶の湯に使用された事である。南蛮、茶壺、切溜花入、メ切建水、粽、内洪水指と呼ばれた茶陶が、堺において16世紀後半～1615年大火の茶室等から一括出土している。他方、当初から茶の湯に使用する目的で輸入したものもある。「宋胡録」と呼ばれたタイ・シ・サッチャナライ窯系鉄絵香合、ベトナム白磁碗である。

日常食器ともてなし用の組物、ケ・ハレ用の組物、茶の湯に関する茶陶と懐石料理の組物が近世陶磁器の確立へと走らせた。茶陶には一点主義が見られ、明らかに使用者の選択・個性化が知られる。茶陶システムの確立は、陶磁器の種類・器種・数量において多様性、多量化が見られ、日常食器にプラスして出土することから、16世紀後半～17世紀初頭にあつては爆発的増加を示している。この時期は東南アジア貿易が特徴であり、東南アジア陶磁器は近世茶の湯システムの確立過程と連動しているのである。それらを動かした人々は経済的中间層の都市民であり、そういう意味でも、茶の湯を使った経済人としての「もてなし」、茶人としての「ステイタス」「個性化」が近世茶の湯システムと近世陶磁器を成立させたと言っても過言ではない。

## はじめに

東南アジア陶磁器は、東アジア・東南アジア貿易システム・近世茶の湯システムの確立・近世陶磁器の確立に大きな役割を果たした。

本稿は、日本の遺跡出土の15～17世紀における東南アジア陶磁器に関する基礎的研究に主眼を置いたものである。したがって、全国出土の東南アジア陶磁器の出土例を網羅したものではない事を冒頭で申し述べておきたい。あくまでも、私の仮説、案の提示と考えていただくと、本文を御理解していただけると考える。

「東南アジア陶磁器」と言えば、我々考古学的方法で陶磁器を追究してきた者にとって「日本陶磁器ではない」「朝鮮王朝陶磁器ではない」「中国陶磁器ではない」「西アジア・ヨーロッパ陶磁器でもない」したがって、「東南アジア陶磁器であろう」としてきたのが、1980年までの研究であった。それは、生産窯の特定や日本の遺跡で東南アジア陶磁器としての認定作業又は、ピックアップ作業が行われていなかったからである。ところが、1980年代後半以降、アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリア・フィリピン・日本の研究者が東南アジア諸国の研究者との共同研究調査によって生産窯の特定、輸出港が判明しつつある。又、沈没船の調査もデータが追加され、点的研究から世界的視野に立件した交易の研究にも主眼が移りつつある。

一方、日本における中近世遺跡の発掘調査は、東南アジア陶磁器研究に拍車をかけた。本稿では、近年得られた東南アジア陶磁器の生産窯の特定、年代観の作業を行うと同時に、輸入産物の容器としての輸入された東南アジア陶磁器に目を向けた。一旦、輸入された東南アジア陶磁器がどのように転用されて使用され近世茶の湯スタイルの確立にどのように関与したのかに触れる。他方、東南アジア陶磁器を使用した人々、さらに彼らが使用した東南アジア陶磁器の存在がいかに「近世陶磁器の確立」に深く関わったかに筆を進めたい。そして、それらの東南アジア陶磁器の輸入傾向からみた東南アジア・東アジアの貿易システムの変化と冊封体制下の政治的变化との連動性について言及することを目的としているのが本稿である。特に本稿では、堺環濠都市遺跡（略記号SKT）として表わされる15世紀から17世紀初頭における国際貿易都市（外港）・堺で出土した東南アジア陶磁器を主として研究したもので、私の東南アジア陶磁器研究の第1段階と考えていただきたい。

## ①……………研究史

元来、東南アジア陶磁器の研究は、宋胡録や交趾香合に代表される美術史・伝世品研究が先陣をきって研究が進行していた。そんな中、考古学的な観点からセレベス島・フィリピン、沖縄の出土品を分析した鎌倉芳太郎1925年『セレベス、沖縄発掘古陶器』（図書刊行会）は中国陶磁以外に、タイ・ベトナム陶磁器の存在価値を評価すべきことを述べた。1982年に刊行された'WITTE LEEUW'（1613年の沈没船）RIJKS MUSEUM amsterdamでは、ミャンマー陶磁器（No.12116・12121 OKS1977/120）やタイ・ノイ川窯系四耳壺（No.12211, OKS1977/139）が提示されており、後に日本で発掘されたものの中に2種類が存在していた。1989年、森村は、タイ・ノイ川窯、タ

イ沈没船引き揚げ品の現地調査をふまえてタイ・ノイ川窯系四耳壺を紹介し、同類が堺環濠都市遺跡でも出土していることを発表した。John, S. Guy は東南アジアの陶磁遺跡出土地名表を公表し、東南アジア全域にわたりタイ・ベトナム陶磁が中国陶磁と共存する形で輸出・検出される事を紹介した。

1990年9月、町田市立博物館に於いて「インドシナ半島の陶磁器—山田義雄氏寄贈コレクション」展で体系的展示が行われた。1991年9月、金武正紀、横田賢次郎、有島美江、森村が東南アジア陶磁器について論を展開し、これを機会に考古学研究者がピックアップ、報告書掲載することが増加した。

今日の東南アジア陶磁研究が進んでいるのは、日本貿易陶磁研究会の努力による所が大である。

同年11月、森村は“WITTE LEEUW”号の陶磁器でも、タイ・ノイ川窯系四耳壺を紹介した。1992年、森本朝子は、アマラ・スリサッチャト女史との対談の結果を『博多出土のタイ陶磁について』として発表した。同じく森本朝子は大坂城下町遺跡・道修町の道修町大火（1708年）又は、妙知焼（1724年）の一括品に含まれるベトナム鉄釉印花文碗の生産地は、北部ベトナムのポブレ窯と、パッチャン窯の製品と特定したと報告した。

1992年9月、福岡市美術館、尾崎直人は「ベトナムの陶磁」展に伴う図録で、伝世品以外に、遺跡出土品も掲載・解説した。1993年10月、根津美術館は「南蛮・島物—南海請来の茶陶—」展で、伝世品と遺跡出土品を同時展示し、16世紀末葉から17世紀前半に出土するタイ・ベトナム陶磁が伝世品の茶陶と酷似、使用されていた可能性を指摘した。1993年に刊行された、1600年12月14日沈没したサンディエゴ号のレポートでは、2タイプ（同時期に9タイプを焼成している）が掲載され、その生産窯を「Noi Kilns」と明記した。1993年9月、続伸一郎は、ベトナム製焼締長胴瓶、四耳壺について紹介し、その後大坂・長崎・博多・平戸でも注意して報告されるようになる。1993年3月、金武正紀は、沖縄のグスクを中心とする東南アジア陶磁を紹介すると同時に、〈太祖実録〉〈歴代宝案〉と合体させ、いかに15・16世紀における琉球国が東アジア、東南アジア諸国の明に代わる中継貿易国であったかを立証した。又、氏は、タイ・ノイ川窯系四耳壺は、〈歴代宝案〉にみる香花酒を入れ暹羅国から輸入された」と結論付け、アユタヤ窯系土師質壺蓋しか出土しなかった事を、このタイ・ノイ川窯系四耳壺に入れられた香花酒の蓋とした。それによって、蓋しか出土しなかった謎が解けたとしている。1993年2月、東京国立博物館において、「日本出土の船載陶磁—朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム—」展が開催され、我国出土のそれらの陶磁器が一堂に展示、網羅された画期的な展示であった。1995年3月、森村は「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」の文章を書き、16世紀末～17世紀初頭におけるタイからの硝石・鹿皮の輸入と共に、タイ・ノイ川窯系四耳壺、シ・サッチャナライ窯系鉄絵香合が輸入されたと考えた。又、これらの産物は、日本国内における当時の、政治的・軍事的緊張を表出した結果であるとした。1996年2月、土岐市美濃陶磁歴史館での「堺衆のやきもの—堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁—」では、ベトナム陶磁が建水・切溜花入として転用していた事を証明した展示であった。1996年6月、町田市立博物館で、「國分孝雄コレクション、タイ・メソット出土 縁絵のうつわ」展が行われ、図録、No. 73, 74 白釉盤が、堺環濠都市遺跡で16世紀末葉には輸入されていた事が、後日判明した。1997年に長年の発掘調査の成果を報告書として刊行された菊地誠一氏は、ベトナム焼締陶器の分類と、製作技法、生

産地について論及した。さらに茶道資料館・MOA美術館で、1998年10月、「交趾香合—福建省出土遺物と日本の伝世品—」の展示において、福建省平和県田抗窯跡で生産されていた事を公開した。したがって、「交趾香合」とは、交趾帰りの貿易船が濠州、月港に寄港したことから、この名前が付いたと考えられるようになった。石井米雄は、1999年11月『タイ近世史研究 序説』で「第5章 アユタヤの陶磁貿易」の章立てを行い、陶磁器と他の産物との相互関連した輸入品について触れ、「陶磁器が輸入品目でない理由」についても言及した。本書では、アユタヤ王朝を「中世的」貿易国家と位置付けている。2000年3月には、檜崎彰一、H. Leedom Letterls Jr., Louise Allison Cortによって、現存する焼締陶器の生産方法についての現地調査報告書が刊行された。東南アジア諸国も近代化が進み、土器作り村（タイでは、バーン（村）・プー・モア）が開発消滅しており、これらが都市外に存在し、都市へ供給したシステムも崩壊の危機に瀕している現状においては、技術論、生産システム論、流通論を論じる基礎的研究である。

以上、列記した様に、東南アジア陶磁器研究は相当進み、新たな研究テーマを求めながら進行している。

## ②……………東南アジア陶磁器の年代観

東南アジア陶磁器を含有した年代観の指標になりつつ、一括性のあるものについて下記に列挙した。

### (1) 沖縄県那覇市首里城跡「京の内」跡・SK01出土一括陶磁器

年代—1453年または1459年（下限年代であり、備前・乗岡編年では15世紀第1四半期である。）

年代については金城亀信が1998年3月の報告書、1998年7月の『陶説』第544号、1998年第437号の『考古学ジャーナル』の見解に従った。この一括性の重要性は三つある。一つは、15世紀代の年代判定可能な資料である。二つ目は、中国・日本・東南アジア陶磁器を含む、三つ目は、器種と数量の多いこと、である。さらに、一括性を物語る最大の重要性は「歴代宝案」にみる琉球国が明の冊封体制の下で、東アジア、東南アジア諸国の立地的な中間に位置し、政治的、国際関係上にも重要な立場であった事を実証している。

#### (イ) タイ・ノイ川窯系四耳壺（第2図）

報告書ではこのタイプを「シー・サッチャナライ窯群のコ・ノイ窯の所産……」と記されていた。バン・コーノイ窯ではない。その根拠は、以下によるものである。

- ① 森村の現地調査における地表分布調査でも確認されていない。
- ② バン・パヤン61号窯（現在、保存館が建設されている。）では、12～14世紀の須恵器に似た灰陶壺、甕が検出されているが「京の内」跡出土の窯跡の発掘調査事例がない。
- ③ 表採された壺片にはノイ川窯系に知られる横耳と同一帯でめぐらされる数条の沈線を巡らす壺はない。
- ④ 外胴下半には、ロクロ回転ナデでヘラケズリを施すノイ川窯系がない。

⑤ 15世紀代の壺口縁端部における上部への引き上げた陶片がない。

⑥ 今帰仁グスクの同タイプを実見したアマラ・スリサッチャト氏は、メナム・ノイ窯と教示した。

したがって、「シ・サッチャナライ窯群のパン・コ・ノイ窯」とするには無理がある。「京の内」跡出土の「タイ産褐釉陶器」は、ノイ川窯系とするのが妥当である。「パン・コ・ノイ窯」における発掘調査において首里城の同タイプが検出されればその段階において訂正する予定である。76個体以上を数えるノイ川窯系壺には黄緑色、黒色、茶黒色、茶褐色、黄茶色、黒褐色の施釉がされている。金城氏は、大型壺をI～VIII類、小型壺を3種に分類している。このタイプ分類数は、くしくも、タイ国芸術局考古部が報告した1992年の10分類近い。年代については、基準資料がなく、1995年に作成した森村編年の最古段階を15世紀後半にとどめていたが「京の内」資料によって15世紀中葉まで引き上げ修正する必要がある。また、金武正紀が指摘のとおり、14世紀後半（今帰仁グスクの出土例）に引き上げられる。なぜなら、ノイ川窯系壺は、1351年に建設されたアユタヤ朝に供給するためと考えられるので金武正紀の意見に賛同したい。SKT182-10（三和銀行駐車場前）地点では首里城跡タイプと併行期の黒褐釉壺（堺概報第6冊・1990年9月刊、p.23・14図70）が出土していた。金城亀信は沖縄県下の出土例として今帰仁城跡、尻川原遺跡、湧田古窯跡、首里城（南殿・北殿跡）、宮平ノ口殿内遺跡、クニンドー遺跡、阿波根古島遺跡、糸州グスク、糸数城跡、カイジ浜貝塚、上村遺跡、慶来慶田城遺跡、与那原遺跡、慶田崎遺跡、高嶺古島遺跡、玉代勢原遺跡、御細工所跡、ヒヤジャー毛遺跡の計18遺跡の63個体以上をリスト作成している。

(ロ) クメール黄緑釉壺（報告書・第78図-6）

クメールとしたのは胎土、口縁部の成形、肩、最大部の文様、底部端部の処理方法からである。これ以外には日本での出土例はなく「世界陶磁全集 16 南海」（1984年刊）の第191図 Fig.53に類例が提示できる。

(ハ) アユタヤ窯系土師質壺・蓋（第3図）

報告書では「タイ産半練土器」と呼称しているが私見とタイ研究者の見解に従い、あくまでも「アユタヤ窯系」とした。金城亀信は報告書で、蓋端部からI～VIII類、撮（つまみ）をA～C類に分類分析した。従来より蓋に比して壺身が極端に少なかった。今回の一括性から金武正紀は「歴代宝案」に記載されているタイからの礼物に香花酒が知られていることからノイ川窯系施釉四耳壺に香花酒を入れ、これで蓋をしていたとした。金城亀信の8タイプ分類数はアユタヤの発掘調査においても同一層から多種類が検出されて入るので時期差を表出しているものではない。むしろ、王都アユタヤに供給した窯、陶工差にすぎないと考えるのが自然である。この蓋の出土例は、博多、長崎、沖縄（今帰仁城跡、勝連城跡、浦添城跡、越来グスク、山田グスク、佐敷グスク、我謝遺跡、親富祖遺跡、伊是名グスク、御細工所跡、阿波根古島遺跡、北谷城第7遺跡、糸数城跡、那覇港埋立地、伊原遺跡、フェンサ城貝塚等）で、圧倒的に沖縄に集中出土する。輸入産物との深い関係を思い知らされる出土傾向を示す。

(ニ) ベトナム青花

ベトナムチュダオ窯系青花宝相草文瓶の文様の緻密な配置、貼り付け窓、8葉弁口縁部葉、ベトナム青花で極めて優品であると同時にベトナム青花の出現年代を知る貴重な資料である。根拠はな

いが、ベトナム青花の出現期を14世紀後半に近づける資料である。

(ホ) 龍泉窯系青磁

青磁碗の雷文帯、雷文帯下の文様の丁寧さ、内面の人形手の多さ、土龍泉タイプの少なさは、1467～1477年、応仁の乱の迂回によって沈没した和歌山県加太友ヶ島沖引き揚げ青磁には見受けられない。馬上坏（高足坏）はSKT82地点、青磁溜まり（1399年大火面より2面上層、15世紀第2四半期）のそれに酷似する。

(ヘ) 建窯系天目茶碗

建窯系水吉窯に代表される黒色で白色砂粒を含有する胎土を有する建窯本体の製品は、一点も実見できなかった。金城亀信がI～IX類に分類したごとく高台削り、胎土、施釉方法（一部に二重掛け有り。図版67-7）形態にバリエーションが多いことは、福建省内において14世紀前半以降に出現する倣建窯の製品であることを物語っている。従って、1点ずつ個体差がある。この傾向は、那覇市銘苅原遺跡でも見る。このバリエーションの多さは1996年、森屋直樹氏・森村健一のSKT506地点 第10面（15世紀中葉）出土の黒釉碗のバリエーションとその数の多さに共通性を見いだす。このバリエーションの多さは14世紀前半以降にあって福建省内に分散した窯跡（大口窯、半路窯、遇林亭窯、茅店窯等）の多さを暗示するものである。

(ト) 備前播鉢

この形態は乗岡編年中世4期b—備前・胡那山下窯、岡山すくも山遺跡、大阪府枚方市楠葉野田西遺跡の1435年銘瓦共伴資料に類似するものである。那覇市銘苅原遺跡でも同タイプを4点出土した。

(2) フィリピン・パンダナン島沖沈没船（15世紀第2四半期）

首里城跡「京の内」跡の一括品に近い時期の沈没船引き揚げ陶磁器がある。

沈没船はフィリピン・パラワン・パンダナン島沖合、250mで水深約40mに横たわっていた。本格的な調査は、フィリピン国立博物館が行い資金援助をエコー・ファーム・システム・アンド・リソーセスKK、ジェルマー・インターナショナル・コーポレーションKKが行った。引き揚げ作業は、1995年2月27日～5月17日まで行われた。

引き揚げた品は、陶磁器：タイ・スコタイ窯、ベトナム青花、ゴーサイン窯、中国・龍泉窯、景德鎮窯系：中国銭、永楽通宝24枚、フィリピン産移動式カマド、大・中・小のサイズ違いの銅鑼（5個体）、地中海産赤サンゴ首飾、中国大砲（2門）、青銅製ランプ等の総数4822点有り、内陶磁器は4000点を越す。数量的には、ベトナム⇨中国⇨タイの順に多い。沈没船は15世紀中～後半にかけて嵐によって難破したと考えられる。琉球国を中心とした東アジア、東南アジア諸国の中継貿易国であったのに対し、フィリピンはその補助的な中継貿易国として位置付ける事ができる。

以下は、1995年、沈没船引き揚げ調査と引き揚げ陶磁器を実見させていただいたデータに基づいている。松木哲氏の指摘するところでは、東南アジア船の可能性が高い沈没船で、船内から24枚の中国銭（開元通宝—960年・1枚、祥符通宝—1009年・2枚、永楽通宝—1408年・5枚）の景德鎮窯系青花牡丹唐草文短頸壺は、正統2年（1437）没と考えられる江西省新建県朱盤拭墓出土の青花牡丹唐草文有蓋壺に酷似している。これらのことを総合すると15世紀第2四半期に沈没し

たと考えられる。沈没した年代は、永楽通宝初鑄年 1408 年から宣徳通宝初鑄年 1433 年とその直後に推定される。

### (3) 大分県中世大友城下町跡, 第3次調査・SK210一括品

年代—1586年, 島津氏侵攻に伴う火災面

5間(195cm=6尺5寸=1間幅)の道路より一段奥まった位置から2列×5個の備前大甕埋甕遺構が検出され, その内から焼土と陶磁器類が出土した。国際貿易都市博多に代わる貿易港として構築しようとした大友氏の国際貿易基地戦略を中国, 東南アジア陶磁器にみることができる。大友城下町跡の重要性は, 坊津→府内→堺という16世紀末～17世紀初頭における貿易ルートの確立を認定するに必要な遺跡だということである。

備前大甕は元亀2年(1571)銘, 天正10年(1582)銘, 天正11年(1583)銘に酷似した口縁形態を有し, 文禄3年(1594)銘より古い様を呈する。1586年という段階は, 森村が言うところの近世陶磁器萌芽期である。それを表出する陶磁器は景德鎮窯系青磁花小皿, 漳州窯系青花盤, 福建・広東窯系陶器播鉢, 壺, タイ・ノイ川窯系四耳壺, ベトナム長胴壺, ミャンマー黒褐四耳壺, 信楽窯系壺, 華南三彩壺である。中世と異なる多地域, 多窯系, 多器種が, 近世陶磁器を意味している。

### (4) 大坂城跡遺跡(中央区大手前4丁目・元大阪市立中央体育館)

年代—1591～1598年

ベトナム白磁碗は土壙SK507, 508から瀬戸・美濃窯系灰釉丸碗の高台内に天正19年(1591)を示す墨書が確認された。共伴遺物としては, 瀬戸・美濃窯系鉄釉天目碗, 瀬戸・美濃窯系鉄釉甃皿, 瀬戸・美濃窯系灰釉菊皿, 景德鎮窯系折枝花文碗, 漳州窯系青花折枝花文盤, 朝鮮王朝陶磁白磁碗, 灰釉碗, 赤楽窯系軟質施釉陶器等である(※青花の内, 漳州窯系青花が約3割を占める)。尚, 墨書は, 「六丁目 妙善 井ツハラ 卯ノ年祈」であった。ベトナム白磁碗において年代観が判明している例としては1585年焼亡の根来寺跡, 堺環濠都市遺跡(SKT47地点・SB09—博列建物—三階倉)の1596～1615年大坂夏の陣大火層より検出している。

### (5) フィリピン・サンディエゴ号沈没船(1600年12月14日沈没)

引き揚げられた陶磁器の重要性は, 景德鎮窯系青花芙蓉手(八光開)盤の出現を示す貴重な資料である。景德鎮窯系青花芙蓉手と漳州窯系青花芙蓉手がモデルとコピーの生産関係を明示したことを表す。芙蓉手タイプは1600年のイギリス東インド会社, 1602年のオランダ東インド会社のヨーロッパ向けのデザインとして生産開始を裏付ける陶磁器である。

スペイン旗艦サンディエゴ号は1600年12月14日早朝, オランダ旗艦モーリシャス号によって沈没させられた。その場所は, フィリピン・ルソン州フォーチュン島沖の水深52mに及ぶ海底で発掘された。発掘調査は, フィリピン国立博物館とフランスの石油会社エルフが共同で実施した。サンディエゴ号は, 1991年4月に当初発見され1992年2～4月, 1993年2～4月に引き揚げ作業を行った。1565年以降, スペイン領であったフィリピン及び南中国海の支配権, 貿易システムの主

導権は、これを機にスペインからオランダに移行する。スペインにとっては、東アジア、東南アジア貿易の中継基地であるばかりか、ヨーロッパの太平洋海域貿易の一大中継基地を手放すこととなった。カタマラン型潜水調査船カイミロア号の原子力磁気共振磁力計で船体の残留鉄を探索した。これによって沈没船は、海岸から400m沖であることが判明した。船体はフォーチュン島に船首を向けて沈没しており、ガレオン船の竜骨、肋材、側板、主柱、舵を検出した。ミャンマー黒褐釉白釉列点文壺（8個体以上）、タイ・ノイ川窯系四耳壺（5タイプ・10個体以上）が、報告されている。その他の共伴遺物は中国錠前（SKT39地点、SB301でも出土例有り）、移動式カマド、華南三彩壺、景德鎮窯系青花、漳州窯系青花、銀コイン、万曆通宝、砲玉、ヘルメット、大砲、日本刀の鐔、安平壺、福建・広東窯系壺等である。

#### （6）ビッテ・レウ号沈没船（1613年11月1日沈没）

アフリカの西、セント・ヘレナ島沖に沈没したビッテ・レウ号（Witte Leeuw号）は、1613年本国オランダに帰航中のオランダ東インド会社の貿易船であった。1976年に発見され1977年公表された。ビッテ・レウ号は、1600年1月30日にTexelを出帆し東南アジアに向かった。貨物は1571袋のBantam胡椒、ダイヤモンド等で陶磁器は目録には記載がなかった。ダイヤモンドは1317個、480 1/2カラットである。1613年5月中旬にセントヘレナ島に寄港して修理していた。ジェームスタウン湾に沈没したビッテ・レウ号には胡椒以外にナツメグ、チョウジの香料が積み込まれていた。

ビッテ・レウ号 引き揚げ陶磁器の重要性は我々にとって大坂冬の陣（1614年）、大坂夏の陣（1615年）の大火焼土層の年代決定に重要な比較資料である。特に、平戸オランダ商館跡（1609年～）、大坂城跡、堺環濠都市遺跡、兵庫津遺跡において有効である。芙蓉手の景德鎮窯系と漳州窯系の両青花に加えて名山手タイプ、モンスターマスク文鉢、クンディタイプ、ペンシルドロイングタイプはサンディエゴ号にない新しいタイプで、名山手、モンスターマスク文様の両タイプは型押しによる窓部のへこみが確認できた。ミャンマー黒褐釉白釉列点文壺（4個体以上）、タイ・ノイ川窯系四耳壺（2タイプ・4個体以上）、アユタヤ窯系土師質壺蓋（4タイプ）が出土した。

### ③……………輸入産物の容器としての東南アジア陶磁器と茶陶として 輸入された東南アジア陶磁器

遺跡から出土する東南アジア陶磁は二つの性格を有している。一つは東南アジアから輸入された産物の容器からの転用された陶磁器。もう一つは、当初から茶陶として生産された物、茶陶に利用する目的で輸入された日常用の東南アジア陶磁である。

#### 1 輸入産物の容器としての東南アジア陶磁器

##### （1）タイ・ノイ川窯系施釉四耳壺——タイから香花酒を輸入した容器

先述した1459年焼失一括品である沖縄・首里城跡「京の内」跡SK01出土のこの壺は金武正紀によって成化16年（1480）以降の「歴代宝案」の記録、共伴する陶磁器が飲食器であること、こ



の壺の蓋に使用されたアユタヤ窯系土師質壺・蓋とセットとなるべき土師質壺・身4個体が大き差をもって出土していること。この四耳壺（推定76個体）とその蓋（推定63個体）と近似数を示していることに根拠している。当初、森村は、首里城跡のこのタイプの壺は三眼鏡に使用する火薬の原料としての硝石をタイから輸入する容器と考えたが、金武正紀説に今は賛同している。それは上記の有力な根拠に加え明との強力な冊封体制下の琉球国にとって「天工開物」に見られるように中国産硝石を輸入していると考えたい。

## (2) ベトナム長胴壺——16世紀後半～17世紀初頭に砂糖の容器として輸入

首里城跡「京の内」跡出土のタイ・ノイ川窯系四耳壺と同様に壺内の内容物を特定する科学的根拠はないが、陶磁器から貿易システムを考察するには多少の危険と推論によって仮説を行った。

### ベトナム長胴壺を砂糖の容器とした理由（第4・7・9図）

#### ①蓋の存在

長胴壺の肩部に蓋と共に焼成していたことを示す変色があり出土例としてはSKT230地点、SB01、大坂城跡・ドーンセンター用地がある。蓋はSKT655地点、第4次整地層（16世紀後半）No.139, No.140, SKT506地点が実見出来る。蓋身と蓋が共に陶器であることと、肩部で蓋端部とに隙間が存在することから考え、液体物には不適當である。

#### ②口縁部の段と沈線

この長胴壺には必ず口縁端部外面に段及び沈線が認められる。さらに蓋とセット焼成していない一群（SKT230地点、SB01・25個体以上）がある。このタイプは壺口縁に壺底部を乗せて重ね焼きしている。従って壺口径と壺底径はほぼ一致している。これは、焼成・運搬方法としては合理的である。このタイプの壺は軟質物の蓋を被せて紐で縛っていたと考えられる。①②条件や、壺内外に施釉されていないこと、広口壺で液体物として不向き、ベトナムからの輸入では施釉されていない条件では液体物では漏れる危険性があることを総合すると、この長胴壺に入れられた内容物は、液体ではなく固形又は粉末物と推定したい。

#### ③出土量から

この長胴壺は、堺環濠都市遺跡において1～3軒分の屋敷地を発掘調査すると1個体以上を検出している。例を挙げると、SKT655地点では生活面共に5軒分の屋敷地を検出した。第1次遺構面（1596～1615年面）の1軒分にあたる屋敷地内土壌・SX110より長胴壺1点が出土した。SKT655地点・第1次焼土・第1次面（1596～1615年）で長胴壺片を31片、第2次整地層・第2次面（1585～1596年）で4片、第3次整地層・第3次焼土・第3次面（1575～1585年前後）で13片、第4次整地層・第3B次面、第4B次整地層・第4次面（1553年前後～1575年前後）で5片、以下の層、生活面では検出されなかったが、タイ・ノイ川窯系四耳壺が21点カウントされている。SKT214地点の第3次整地層（1596～1615年）で長胴壺片1点を、第3次生活面・SG01（1596～1615年）の1軒分の屋敷地内遺構から長胴壺片1点出土している。SKT230地点第2次焼土層（1596～1615年）で縄文長胴壺2個体を1軒分の屋敷地内で検出した。同じ1軒分の埧列建物・第2次生活面SB01より25個体以上の長胴壺を見いだした。SKT202地点・第2次生活面SB03

(1596～1615年)で長胴壺2個体分、同一面(同年代)SB05で長胴壺1個体、第4次生活面・1軒の礎石建物内土壙S29より長胴壺1個体を検出した。冒頭に記したように屋敷地1～3軒に1個体以上について検出していることから日常生活品に必要な輸入産物の容器と想定出来る。

#### ④河盛家所蔵世界地図屏風(1591～1598年描写)

記述してきたベトナム・ミースエン・フックテイク窯系長胴壺が交趾で生産されていたことは、前述の通りである。堺の旧家河盛家所蔵世界地図屏風に記載された輸入産物で長胴壺に入り、日常生活品で、液体物ではない産物の「黒砂糖」である可能性が大である。岩生成一によると堺環濠都市遺跡で出土するベトナム長胴壺と同年代の朱印船の動向については次の様である。慶長9年(1604)～元和元年(1615)までで交趾への渡船数28回と、呂宋、暹羅についで多い。もちろん朱印船貿易だけが貿易システムの全体像とは考え難く、むしろ私貿易が主流をなしていたことは、言うまでもない。

以下の資料は、当時砂糖が貿易品目の内重要な産物であったことを物語っている。

- ・[多聞院日記]
- ・ポルトガル船輸入品目一覧
- ・日本市場輸入暹羅商品数量表(1634年)
- ・「唐船貨物改帳」1712年8月14日付
- ・長崎オランダ商館の砂糖販売量(1641～1765年)

#### ⑤河盛家所蔵世界地図屏風に見る輸出入品

描写年代は秋岡武次郎氏が類例から判断して寛永14年に描写された地図としている。がしかし、この世界地図屏風と一対を成す日本地図屏風がある。その地図には、肥前の「ナゴヤ」と言う地名が記されている。名護屋城築城が開始されたのは、天正19年(1591)で慶長の役の終焉によってその地名が忘れ去られることを考えると、この地図の描写年代は1591～1598年とされる。1583年以降の秀吉の大坂城、1590年に家康が入城して改築・拡張した江戸城も描写されている。昭和7年11月16日、大阪府立貿易館で天覧を受けたこの世界地図は、フランス・オルテリウスの1570年以降に知られる世界地図の系統を継承している。同一タイプの世界地図は秋岡武次郎氏によると、「京都・石橋五郎博士蔵大陸図」「鶴見総持寺蔵南瞻部世界図」「古河鷹見久太郎蔵大陸図(天保7年写)」がある。この地図の重要性は朱印船貿易地が記載されていることに加え、「タカサゴ」,「多加佐古」が明とは別色で大きさを強調して描写していることにある。この世界地図の右側に記された文章にも、「多加佐古」が「大明国内」から独立した存在であることを示している。朱印船総数の356船の内、高砂へは36回と多く明と日本との中継貿易国としての重要性を暗示している。特に、後述する漳州窯系陶磁器の輸出港である漳州・月港は対岸である。漳州窯系陶磁器は秀吉と明との国際関係の悪化により景德鎮窯系陶磁器に代用された日常食器及び茶陶である。この時期における漳州窯系陶磁器は景德鎮窯系のそれを凌駕していることが長崎・大坂・堺で報告されている通りである。河盛家世界地図屏風にも「漳州一右福州同前ひろうと白砂糖黒砂糖皿茶碗手之悪物出……」と明記されており前述の条件を考え合わせてもベトナム長胴壺に「黒砂糖」を入れて輸入したと結論づけたい。なお、元禄2年堺絵図(1689)には、「(砂糖屋)伊兵衛 6-2-083地点、屋敷

地 7×10 間」 「砂糖屋長右衛門 1-2-209 地点, 屋敷地 3.5×20 間 (元和元年割符糸 13 斤下附される)」が見られる。

### (3) 硝石の容器として輸入されたタイ・ノイ川窯系四耳壺

タイ・ノイ川窯系四耳壺が急増するのは 16 世紀後半～17 世紀初頭までであり, 特に 1615 年大坂夏の陣大火層から出土する傾向にある。出土量としては堺環濠都市遺跡出土例が大坂・長崎・平戸を引き離している。と言っても, この壺に硝石が入って出土した例はない (※硝石は土中の水分で分解する)。ましてや, 輸入産物の容器として輸入後において転用, 出土している場合は, なおさら不明確である。しかし, 文献や歴史的背景を考慮した場合, 中国の硝石『天工開物』(1637 年) より良好の硝石を求めたのは, 秀吉・家康である。両者の朱印船貿易における最大の目的は, 火薬 (木炭・硫黄・硝石—消石・煙硝・塩硝ともいう) の 70% を占有する良質の硝石をはじめとした鉄砲玉の原料となる錫, 鉛, 甲冑の下着, 尻あて, 武器に使用された鹿皮といった軍事物資の確保にあった。16 世紀後半～1615 年までは, それ以前の東アジア貿易から東南アジア貿易システムに変容した時期である。秀吉の「天下統一」, 「文禄・慶長の役」, 「関ヶ原の戦い」, 「大坂冬の陣」, 「大坂夏の陣」は, 硝石をより必要とした歴史的背景を有している。その内で朝鮮半島出兵以降にあっては, 中国からの硝石輸入が困難をより極め, タイに硝石の輸入先を変更したと考えられる。当時, シャム国王への 3 通の書簡は, 家康がシャムに歴史を変革するに必要な硝石であることを検証している。同時に, この時期アユタヤ王が軍事物資である硝石の規制を行っていたと考えられる。

異国出契 (昭和 5 年影写本 <京都大学文学部蔵>・国立公文書館原蔵)

- ①大御所徳川家康親書 (慶長 11 年 9 月 21 日付 シャム国王宛)
- ②本多正純奏状 (慶長 13 年 10 月 10 日付 シャム国左右大臣宛)
- ③大御所徳川家康親書 (慶長 15 年 7 月日付 シャム国王宛)

『堺衆』1989 年 堺市博物館 より

- ① 1606 年家康がシャム国王に奇楠香 (キナンコウ) と鉄砲の贈与を求めた書簡。
- ②家康の命を受けた本多正純が, 1608 年に鉄砲と塩硝を求めた書簡
- ③家康は, 1610 年 7 月に再度シャム国王へ書簡を送り鉄砲と塩硝を求めた。

この 3 通の手紙は, 家康による豊臣政権から徳川政権への決定的移行をねらった大坂冬の陣 (1614 年), 大坂夏の陣 (1615 年) の準備と考えるのが当然である。余命短いと悟っていた家康 (1616 年没) が残した徳川体制の基礎造りであったことは言うまでもない。これを裏付ける資料もある。イギリス東インド会社平戸商館員であったウィリアム・イートンの手紙として『堺市史』は紹介している。

イートンは大阪を中心にして京都, 堺の間に取引し, 屢堺に赴いてゐる。慶長 19 年, 大坂冬の陣が始まらんとして, 火薬等の多数の需要があったから, 彼れは堺に赴いて, 所持の鉛を売

り込み得るや否やを視察し、其高価となるのを見越して売り放たなかったことを報じ、火薬、鉛、羅紗等を堺に送るやう平戸商館に請求してゐるが、其時彼れはゼエヤ町 (Zeyea) のゼザイ・セーエモン (Zezay Seemon) 方を宿所としてゐた。(慶元イギリス書翰, 1614年10月30日 [慶長19年10月8日] 附, 大阪撥, キリアム・イートンより平戸のリチャード・コックスに贈りし書翰)

硝石、すなわち硝酸カルシウム ( $\text{KNO}_3$ ) はアユタヤ王朝では物納租税「スワイ」と呼ばれ、都市国家アユタヤに物産として集結した。ド・ラ・ルベール氏は、スワイに蘇木、沈香、硝石、象、獣皮、象牙等がアユタヤの輸出品であることを指摘している。輸入された硝石は、国際貿易都市堺が流通基地の舞台であったことが、以下の文献にも管見できる。浄土真宗本願寺第十世証如上人が、記した日記『天文日記』には、幕府が本願寺に塩硝4.5斤を進上したのに対し、堺は10斤納入した。

#### 『天文日記』

(天文二十一年十二月)

七日 室町殿 (足利義輝) へ、塩硝 (煙) 十斤進献之、中務書状 (下間頼言) にて也、此儀一昨日自三淵中務へ以書状、塩硝四、五斤御所望之由候間、堺へ取二遣之進之也

『岩淵文書』では、1575年6月姉川の合戦を準備して秀吉が茶人である今井宗久に対して鉄砲薬30斤 (1斤は約600g)・煙硝30斤の調達を願っている。その後、元禄2年堺大絵図では「塩硝や長右衛門後家」6-1-12,3地点・3×6間の屋敷地を構えているにすぎず江戸中期の平和を垣間見る。博多にも塩硝が輸入されており『豊臣秀吉朱印状 博多惣中苑』は、博多惣中が祝い品の品として塩硝100斤を贈った時の礼状である。大坂の豊臣後期 (1598~1615年) でも火薬が取り扱われていたことを示す「火薬100斤 絹4反」銘の木簡が出土 (大坂城跡・大阪市東区大手前之町2丁目、府立大手前高校第2期改築工事に伴う発掘調査) している。

その他、タイからは16世紀末葉において軍事物資である鹿皮、錫、鉛を輸入したことが「河盛家所蔵世界地図屏風」でも知見された。タイからの軍事物資については、森村の、『東洋陶磁』を参照されたい。決してタイ・ノイ川窯系四耳壺に硝石を入れて輸入したという確証はないが、あえてその可能性を傍証した。

## 2 茶陶として輸入された東南アジア陶磁器

前項は、輸入産物の容器が請求後において別項で述べる茶陶への転用を力説するための段階である。この項目では、茶陶に使用するためにのみ輸入された可能性のある東南アジア陶磁器について列挙したい。そのピックアップの前提は、輸入産物の容器からの転用を思わせる量でないこと、すなわち極めて出土例が少ない事、さらに、茶陶以外の用途が考えられない物、又は茶陶一括品の一部で茶の湯スタイル行為で役割が明白な陶磁器とした。

### (1) タイ・シ・サッチャナライ窯系バン・コーノイ窯鉄絵蓮花束文香合

SKT60 地点・第2層出土 (1596～1615年大坂夏の陣大火面)

共伴した茶陶：福建・広東窯系黒釉四耳壺 (茶壺)，志野長石釉草花文四方隅入向付 (2)，志野梅文向付，唐津皿 (3点が重なって溶着) —懐石料理用，瀬戸・美濃窯系鉄絵天目茶碗，朝鮮王朝陶磁白磁碗 (夏茶碗)，伊賀・信楽窯系蓋付水指

この香合は，茶の湯スタイルの一環である聞香に使用する香を入れる容器である。本来，15世紀代の生産目的であった石灰入れとしてのマンガスティン型ではなく，日本・中国・ベトナムの香合型に変化している。

### (2) ベトナム白磁茶碗

・出土例—— SKT47 地点，SB09・埵列建物内の茶陶一括品中に含む。

・年代—— 1596～1615年 大火面検出

・共伴した茶陶—福建・広東窯系壺 (茶壺)，漳州窯系方形香合，硯，黄瀬戸建水，唐津窯系酒杯，備前播鉢 (懐石料理用)，朝鮮王朝陶磁黄褐釉碗 (蕎麦茶碗)

ベトナムにあっては当時，日常食器として大量生産されていたと考えられ内打ち型されており，堺・大阪・根来寺のそれは同形態，同一技法である。口径は，本例が14 cm，器高5.2 cm，大坂城跡ドーンセンター用地出土例は，復元口径13.8 cm，器高5.0 cm，同中央体育館出土例が，口径13 cm，器高4.8 cmと近似値で型打ち製形されている。

### (3) ベトナム・ミースエンフックティク窯系土師質広口壺—南蛮メ切糸目建水

・出土例— SKT230 地点，SB01・埵列建物茶陶一括品中に含む。

・年代— 1596～1615年大火面

・法量— 器高9.3 cm，口径17.5 cm，底径15.0 cm，最大幅 (径) 18.8 cm

飲料水が気化して冷たくなるように数多くの沈線を巡らした日常雑器を建水に利用する目的で輸入した。茶人，すなわち使用者が他人とは異なった茶陶を所持するというステイタスを満足させるもので，個人の選択，茶陶の一点主義，茶人の個性を表出するに十分な陶磁器である。尚，伝世品で呼称されている「南蛮メ切糸目建水」は，①器高8.4 cm，口径11.8 cm，底径12.3 cm，②器高8.6 cm，口径15.8 cm，底径13.0 cm ③器高7.5 cm，口径16.3 cm，底径12.8 cm，胴径17.2 cm ④器高9.2 cm，口径14.0 cm，底径15.5 cm ⑤器高8.3 cm，口径14.5 cm，底径15.5 cm の例が認められ，建水に取り上げられるサイズである。

SK230 地点の共伴した茶陶と茶の湯関係遺物—絵唐津沓茶碗，朝鮮王朝陶磁白磁夏茶碗，青織部向付，鼠志野四方隅入向付，絵唐津筒向付，景德鎮窯系芙蓉手鉢 (向付)，景德鎮窯系兜鉢 (5個×2組の向付)，硯，唐津皿 (14個体・懐石料理用)，漳州窯系青花盤，ベトナム長胴壺 (切溜花入)，備前掛花生，焼塩壺，炉壇，自在鉤。

### (4) タイ・ノイ川窯系無釉短頸壺—水指，又は茶壺

・出土例— SKT39 地点，第3面 SB302・埵列建物茶陶一括品中に含む

- ・年代——1596～1615年大火面
- ・法量——器高29.5 cm, 口径16.4 cm, 底径17.0 cm, 最大径25.2 cm
- ・特長——窯跡発掘調査での10タイプには含まれないタイプで、特異なタイプである。同時期のサンディエゴ号、タイ湾内の沈没船であるコー・シーチャンIでもこのタイプは見当たらない。茶陶に取り上げられた理由が、薄手で軽い事である。口縁内端部に1本の沈線、底径に6本の沈線、頸部に1本の突帯、底径付近には右上がりのカンナケズリを荒々しく施す。胎土の赤チャートと、黒色鉱物粒の含有はまさに、ノイ川窯系の特長を兼ね備えている底部端部のみカンナケズリが大半は、ハナレ砂のままである。10タイプ分類に属さない。
- ・共伴した茶の湯関係遺物—瓦燈、茶臼、朝鮮王朝陶磁淡緑色釉水注、銅製脚付香炉、瀬戸・美濃窯系灰釉閑香炉、備前掛花生、絵唐津向付、備前種壺（水指）、備前湯桶、唐津片口、福建・広東窯系花卉文灰釉広口壺（水指）、福建・広東窯系黒褐釉壺（茶壺）、銅製燭台、伊賀茶壺、景德鎮窯系青花蓋付牡丹唐草文小壺。

## ④……………東南アジア陶磁器の使用法

輸入された東南アジア陶磁は、国内においていかに使用されたかを分析した。しかしながら、日常生活品においていかに使用方法に不明な点が多いのかということも事実である。確実性が高い事例について説明したい。

### (1) 輸入産物の容器からの転用例

#### ①硫黄が入ったタイ・ノイ川窯系四耳壺

##### 例証—1

SKT202地点、第2次生活面（1596年、慶長伏見大地震後～1615年大坂夏の陣大火）・SK16には肩まで埋蔵して使用していたノイ川窯系四耳壺が、ほぼ完形品で検出された。肩より上部は、大坂夏の陣大火によって二次焼成を受け、炭化物が付着していた。店である礎石建物SB07外の約20 cmに位置しており軒下の屋外にあたる場所に設定された掘り方径65 cm、深さ約36 cmを計測する土壌に埋納していた。壺内には、焼土が入っていた。この壺には、内容物が確認されていないが、下層の第3次生活面において検出したSK28に見られたノイ川窯系四耳壺には火薬の原料である硫黄が入っていた。両者は、上下関係層であるものの、同一屋敷地の所有者が慶長伏見大地震被災後に建て替えたものの硫黄を商売とする職業には、変化がなかったと考えられる。従って、本来SK16のタイの壺には硫黄が入っていた可能性が高い。

##### 例証—2

SKT202地点、第3次生活面（1575年大火後～1596年地震面）、SK28では硫黄が納められたノイ川窯系四耳壺が2個体が検出された。この四耳壺は、上辺1.15 m×0.72 mの楕円形土壌内に埋納されていた。南側の四耳壺は、ほぼ水平に、北側のそれは、約50°程南に傾いて検出した。口縁部より下半約10 cmは生活面より上に出ていた状態で、当時は使用していた。壺には、木蓋を行っていた事を示す木片が壺内から出土した。壺全体は、当時、白濁色になった植物繊維で編んだも

ので包まれていたと考えられる。ノイ川窯系四耳壺の北側の壺では約8kg、南側で約3kgの硫黄が詰まっていた。この土壌は礎石建物に隣接していた。従って、この屋敷地は硫黄を商売とする職業と考えられる。尚、時代が下がる資料ではあるが硫黄屋と塩硝屋とは別の商売人と考えられる。前田書店刊、1977年1月、「元禄二己巳歳・堺大絵図」では「いわうや又兵衛」9-2-050地点、屋敷地3×6間、「塩硝や長右衛門後家」6-1-123地点、屋敷地3×6間、と、別個の屋敷地である。もちろん日本は火山国であるので以下に示す通り、硫黄は国内用に及ばず輸出品目でもある。検出されたノイ川窯系四耳壺と同年代の河盛家所蔵世界地図屏風では、日本が安南国東京、天竺国カンボジアに輸出したことが明記されている。

## ②蔵骨器に転用されたタイ・ノイ川窯系四耳壺

堺環濠都市遺跡の都市民の墓地が都市外に4カ所設置され、その一つの向井領三昧墓地からノイ川窯系四耳壺を転用した壺が出土した。向泉寺跡遺跡(KTA-3地点)「向井領三昧墓地」のSI299と名付けられた蔵骨器は口縁を欠損させ逆立ち状態で埋納していた。(堺概報 第59冊・図版6, 12) 壺内には幼児の生の歯5本以上と稻荷社土人形、古寛永(1639～1659年)6枚が、六道銭として出土した。土葬と考えられSI298に切られていた。全体に無釉で、口縁部は欠損しているが類例から判断して16世紀末葉～17世紀第2四半期のタイプの壺を古寛永の年代に蔵骨器として再利用したと考えられる。島弘氏によると、那覇市内の墓地からも口縁部欠損、淡黄褐釉、暗赤褐の胎土によるノイ川窯系四耳壺(15世紀代)が蔵骨器に転用されている類例があるとしている。

## (2) 輸入産物の容器から茶陶に転用されたもの

明らかに博列建物、土壌一括品が茶陶一括品として使用していたことを復元出来る例がある。

### ①ベトナム・ミースエン・フックテイク窯系長胴壺を切溜花生へ

#### 例証—1

SKT230地点、SB01・博列建物では備前掛花生、自在鉤、炉壇と共伴して検出されたこの屋敷地では、博列建物を茶室として利用していたことを証明した。年代は1596～1615年大火生活面である。器高33.0cm、口径11.5cm、底径11.3cm、最大幅16.4cm(肩)

#### 例証—2

SKT202地点、第2次生活面・SB03・博列建物内茶陶一括品中には切溜花生に利用された2個体がある。年代は1596～1615年で、共伴する茶陶として志野長石釉茶碗、青磁香炉、織部黒沓茶碗、備前水指が知られた。

### ②タイ・ノイ川窯系四耳壺を茶壺へ

#### 例証—1

SKT47地点、博列建物・SB04(1596～1615年大火生活面)がある。この四耳壺が茶壺に利用されていたことを物語る茶陶の共伴遺物としては、伊賀・信楽窯系水指、同窯系茶壺(5)、朝鮮王朝陶磁白磁茶碗、備前一輪差し花生徳利、中国白磁聞香炉、朝鮮王朝斗々屋、茶臼、唐津沓茶碗、絵唐津向付(4)、鼠志野草花文向付(5)、美濃窯系茶入(3)、茶室壁土、志野四方隅入向付(10)

#### 例証—2

SKT202地点、第2次生活面・SB05・博列建物(1596～1615年大火面)で唐津窯系茶入蓋、瀬

戸・美濃窯系鉄釉茶入，ミースエン・フックテイク窯系長胴壺（水指）と共伴して，茶陶の一群を構成していた。

③茶陶に転用された可能性のあるもの

茶陶の一括品中から検出されていないが伝世品の例から判断してその可能性のあるものを，以下に示した。

(a) 南蛮粽（ちまき）花生—SKT241 地点

(b) 南蛮内洪水指—SKT655 地点，第3次整地層（1575年大火～1585年前後）では，他の茶陶に朝鮮王朝蕎麥茶碗(2)，瀬戸・美濃窯系灰釉聞香炉，瀬戸・美濃窯系鉄釉天目茶碗，備前建水，備前双耳水指が知られた。

(3) ベトナム日常食器が日本でも食器として利用された例

(a) ベトナム鉄絵印判手文碗

この使用例には二つの特長がある。一つは年代が17世紀後半～18世紀前半の伊万里窯系又は波佐見窯系染付碗・皿と共伴していることに加え，大坂城跡の道修町大火（1708年）や，妙知焼（1724年）の焼土層又は，遺構内から出土することが知見される。二つめは，他の日常食器と共伴することにあるが，希少品であり，大坂城跡の道修町大火の一括例ではハレの組物中に含まれていた。堺環濠都市遺跡では当時の4～5軒分の発掘調査ごとに1片出土する状況にある。森本朝子が言う「お月様マーク」の鉄絵陶磁器である。例として，SKT202 地点，第1次生活面・SK11（17世紀後半～18世紀前半）があり，共伴遺物としては唐津窯系三島手鉢，堺播鉢，京焼系肥前鉄絵山水文碗，タイ・ノイ川窯系四耳壺，ベトナム長胴壺が看取された。

(b) ベトナム青花双龍文輪花皿

伝世品名の「安南染付 菊形皿」と称されるタイプでSKT528 地点，墓地整地層より出土した。にじんだコバルト，見込みの釉上での目痕がこのタイプの特長で高台内無釉，内にコバルトで「福」を記していた。口径20 cm，器高3.8 cm，高台径10 cm。しかし，日本陶磁に肩を並べる出土量ではない事，16世紀後半～17世紀前半の他の東南アジア陶磁器に比して少ない存在である。石井米雄氏は，アユタヤの輸出品の中に陶磁器がない理由として次の3点を提示した。

- ① 輸出量が極少で輸出品目に記載しなかった。例としては長崎の役人への土産品として状況を想定した。
- ② 陶磁器は，中国の特産品であり，「タイ産陶磁器」などと輸出品目に掲げる必要がない。
- ③ 鑑賞目的の陶磁器の輸入はなかった。輸入品の容器として輸入され，生産者も輸入者も考えなかった新たな価値が日本で発生した。同時に，氏は輸出品目として「椰子油」，「漆」，「砂糖」などを挙げている。石井米雄氏の指摘の通り，ベトナム陶磁器においても同様の傾向を示していたと考えられる。東南アジア陶磁器が輸出入品目に記載されなかったのは，景德鎮窯系青花，漳州窯系青花，唐津，志野が安価多量に存在したからだと考える。



## ⑤……………近世茶の湯スタイルの確立と東南アジア陶磁器と 近世陶磁器の確立

前述してきたように東南アジア陶磁器について分析してきたが堺環濠都市遺跡出土の東南アジア陶磁器から見た近世茶の湯スタイルの確立について検証したい。すなわち東南アジア陶磁器が近世茶の湯スタイルの確立に向けて重要な役割を果たした事を証明できたことを冒頭において結論づけておきたい。言い換えれば、東南アジア陶磁器を茶の湯に採用したからこそ近世茶の湯スタイルが確立したと言っても過言ではない。東南アジア陶磁器を茶陶に取り上げられた代表的な出土例は、SKT39 地点・SB302, SKT47 地点・SB04, SB09, SKT230 地点・SB01 の塙列建物内より一括出土した茶陶類である。塙列建物（住吉堺祭礼図—1605年前後 描写年代—三階倉）より出土した出土遺物の内、①炉壇 ②茶室の壁土 ③茶臼 ④茶器（茶碗）特に沓茶碗 ⑤建水 ⑥水指 ⑦茶壺 ⑧茶釜 ⑨聞香炉 ⑩向付 ⑪花生 ⑫茶入 ⑬蓋置 ⑭柄杓のいずれかで構成されていることで茶の湯に関する行為があったと認知した。

近世茶の湯スタイルとは、以下の行為が存在した。

- ①茶室とその空間—露地，庭
- ②抹茶を挽く
- ③花を生ける
- ④書をする—詠歌等を詠みそれを書にする
- ⑤香を聞く
- ⑥茶を点てる
- ⑦懷石料理を食する

これらの行為を裏付ける考古学的な出土遺物によって近世茶の湯スタイルの確立を検証することが出来る。上記の茶の湯スタイルをデータ化したのが、資料7である。もちろん、発掘調査において、茶の湯スタイルがすべて兼ね備えた状態で検出されることは希である。これは、茶人の個性化と経済力が重なる部分がある。

近世茶の湯スタイルの成立過程

- ① I 期—近世茶の湯スタイル萌芽期—1585年前後（天正13年前後）
- ② II 期—近世茶の湯スタイル発展期—1585年前後～1596年（天正13年前後～慶長1年）
- ③ III 期—近世茶の湯スタイル確立期—1596～1615年

それでは以下、それぞれの時期の特長について述べることにする。

その前に、中世茶の湯スタイルとは、1573年焼亡の一乗谷朝倉氏遺跡にその代表例を知り得る。特定のクラス層による茶の湯である。茶の湯スタイルの中で「懷石料理を食する」事を示す同一タイプ、同一文様の組物（4～8個体が多い）が存在しない。茶碗は瀬戸・美濃窯系鉄釉天目茶碗が主流で、大量生産されたものを使用し、個性化がなく小振りである。

### I期—近世茶の湯スタイル萌芽期

有力商人層を中心とした茶の湯の世界である。懐石料理を食するという行為の内、飯碗、皿において組物が出現する。長浜城下町を例として、その組物とは景德鎮窯系青磁稜花皿（4個体）、景德鎮窯系アラベスク文皿（6個体）、同窯系玉取獅子文皿（7個体）、同窯系蛟龍文皿（6個体）である。瀬戸・美濃窯系鉄釉天目茶碗が13片、朝鮮王朝陶磁斗々屋茶碗が67片（11個体以上）が知られ、前段階と異なり朝鮮王朝陶磁が凌駕した。長浜町遺跡—下村藤右衛門邸跡出土例で述べているが全体の陶磁器組成を見ても2564片のうち、57.4%が貿易陶磁に対して、日本陶磁が36.2%、不明が6.4%である。この時期になって一点生産された黄釉軟質施釉陶器灰匙が出現した。

近江八幡に移転する1584年まで、存在していた安土城下町遺跡では、10～15%が貿易陶磁であり、他は、瀬戸・美濃窯系である。長浜の状況は、中世の様に「常に近い」「近いという流通圏」「近いという流通システム」からくる瀬戸・美濃窯系陶磁器の大量生産、画一的製品を使用するという状況は、近世陶磁器萌芽期には見受けられない。特に、この時期に至って長浜では漳州窯青花草花文盤(1)、碗(1)、漳州窯系芭蕉文皿(6)、香合、身・蓋という景德鎮窯系に代わる存在としての漳州窯系青花が出現している新しい要素である。これも、近世茶の湯スタイルと近世陶磁器の萌芽を示すメルクマールである。

### II期—近世茶の湯スタイル発展期

懐石料理の食器の組物の拡充が計られると同時に茶陶に於ける個性化が表出する。すなわち茶人にとって「私しか所持していない」という一点主義により、同一物が無い。注文生産品が出現する時期でもあるが数量的には希である。備前で水指に転用している例として、鉢、種壺が知られるが、SKT655地点、備前双耳水指は、正に一点主義の製品である。軟質施釉陶器黒釉聞香炉（「聞」とは、中国語で「匂いを嗅ぐ」と言う意味。聞香炉と分類した基準は、茶陶類一括品中に含まれていること、手のひらにのるサイズであること、口縁部内側に匂いをこもらせるための「煙りがえし」があること）SKT57地点、1596年面出土軟質施釉陶器黒釉聞香炉、SKT19地点出土の軟質施釉陶器赤釉茶碗、同黒釉茶碗が出現し、一点主義でこの時期以前にみられた正円の茶碗から脱却しており、「歪み」が形態に取り入れられ「茶陶における」「茶人」の個性化が誕生した時期でもある。と、同時に、そこには以前にはない「自由性」「独創性」を茶陶に見る。SKT57地点、SK092（1596年、慶長伏見大地震面）では、唐津窯系茶碗、皿、志野丸皿、備前德利、備前播鉢と共伴して漳州窯系・平和・田坑窯蛙香合蓋が知られ、別名「交趾香合」と呼ばれていたタイプがある。朝鮮王朝陶磁器の茶碗には、大きな変化がある。その変化は、口径が15.0cm以上、器高5.0cmとなり、やや大振りに、意図的なトキン高台、ちりめん高台、鹿の子状のピンホール、重ね焼きで発生した見込み部の赤褐色、明白な鏡の段、外面のカンナ痕、見込みと畳付の砂目は、意図的である。1点1点において差がある。一点主義が形態に差が生じる。釉にあっても、透明釉だけを掛けて胎土の色を出している物、混成釉を掛けたものが見受けられ、茶人の個性化と共に1点毎に異なり、画一的な前段階とは相違する。茶陶への採用には可能性の域を脱し得ないが、SKT655地点でのベトナム内洪水指、ミャンマー白釉盤の存在は特筆すべきである。

### III 期—近世茶の湯スタイル確立期

一連の茶の湯スタイルは、この時期（16世紀末葉～17世紀初頭）段階に確立し、それが現代茶の湯にも受け継がれている。言い換えれば、現代茶の湯の基礎は、16世紀末葉～17世紀初頭に確立したのである。堺環濠都市遺跡では、この時期には1軒ごとに博列建物が存在しその大半で茶陶一括品を検出している。堺都市民は全員茶人であったと考えられる。本来、野点で使用されていた「茶たんす」が茶室でも使用される。銭屋宗納所持之図や、『南方録』のたんすが周知であったが一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉館跡・会所・南庭の井戸から錠、木簡、「たんす」「蟬之御たんすのか記」が出土し、「茶たんす」の考古学的にその存在が確認された。もちろん、伝世品として表千家蔵には、千利休所持とされた茶たんすがある。SKT39地点、SB301（2個体）、SKT200地点・SS201に茶たんすの存在を示す中国製錠前が出土している。水指、茶壺は、新しく伊賀・信楽・丹波が登場する。朝鮮王朝陶磁器にあつては彫三島茶碗（SKT232地点、1615年大火・博列建物内出土）と呼ばれる粉青沙器の中でもより日本化した文様が採用されている。SKT84地点、1615年大火面出土品に代表される絵唐津沓茶碗の出現は、志野・瀬戸黒・織部黒・黒織部茶碗とも同調しており、前段階にも増して大振りであり、より歪みが顕著である。新しいスタイルの花生は備前掛花生（SKT39地点、SKT230地点、SKT655地点）が見られ、それぞれデザインが個性的である。あらゆる茶陶に一点主義、個性化、独創性が表出した時期であることを強調したい。懐石料理の道具にも完成を見た。黄瀬戸、志野、青織部、唐津、景德鎮窯系兜鉢、芙蓉手鉢による向付の組物による新構成である。以前は食器の転用であったが、「向付」という新器種の出現である。備前盤（SKT448地点、SB04）は注文生産を思わせる形態と三つの足を付けている。この時期には懐石料理の食卓塩として焼塩壺を膳にのせている。箸置には、土師質耳皿が用意され、振出、汁注、涌桶の出土をみれば懐石料理に見られる一連のスタイルが完成したのである。漳州窯系陶磁器が茶陶において目立つ存在となる。SKT200地点の青花麒麟文角香合、SKT82地点の五彩牡丹文一輪差し小壺、SKT39地点・SB301の青花界線文小皿（13個体）、青花花文盤、五彩鳳凰牡丹文盤が例である。特にこの時期、日常食器として輸入された漳州窯系陶磁器を茶陶に取り上げている。最後になったが、この時期の特長は正に、東南アジア陶磁器を茶陶に使用していることにある。例としてSKT39地点・SB302のタイ・ノイ川窯系壺（水指）、SKT47地点・SB09のベトナム白磁碗、SKT47地点・SB04のタイ・ノイ川窯系四耳壺（茶壺）、SKT230地点・SB01のベトナム土師質広口鉢（建水）、ベトナム長胴壺（切溜花生）があげられ、近世茶の湯スタイル確立において重要な位置を占有していた。それらの地点にはそこが茶室であった事を証明する炉壇が出土している。その他の出土例として、SKT230地点、第2次生活面・SB01の炉壇は、外法38.8cm、内法約30cm、高さ約34cm、SKT289地点、第2次生活面SB02のそれは外法約45cm、高さ約40cm、上面に炉縁の痕跡—外法約42cmであった。近世茶の湯スタイルは、この時期に確立したことを前述の如く証明したが茶の湯スタイルにおける規則、システムには画一性が存在したが、それとは相互しそこで採用される道具には画一性はなく茶人の独自性がある。

16世紀末葉～17世紀初頭における堺での近世茶の湯スタイル確立には東南アジア陶磁器（伝世品又は、茶会記の『南蛮』）が重要な役割を果たし、その後も茶の湯に採用されていたのである。数千キロもの南中国海、東中国海を大航海したという珍品性と自然性かつ素朴さを兼ね備えた東南

アジア陶磁器の持つ「土物」が茶の湯の自然性と符合していたからと考えられる。近世茶の湯スタイルの確立は東南アジア陶磁器によって成立したのである。東南アジア陶磁器の茶陶への採用こそが近世茶の湯の特長とも言える。

#### 参考文献

1. Virginia M. D Crocco 1991 「CERAMIC WARES OF THE HARIPUNJYA AREA」『The Journal of the Siam Society』VOLUME79, PART I 1991
2. タイ芸術局考古学 1991・10 『Scientific Analysis Results of Ceramic Samples from Excavated Sites in Thailand』
3. 鎌倉芳太郎 1925 『セレベス沖縄発掘古陶器』図書刊行会
4. 金武正紀 1991・9 「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No. 11 日本貿易陶磁器研究会
5. 横田賢次郎 1991・9 「大宰府出土のベトナム陶磁器」『同上』同上
6. 有島美江 1991・9 「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『同上』同上
7. 森村健一 1991・9 「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器—新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用—」『同上』同上
8. 菊地誠一他 1998・3 『ベトナムの日本町 ホイアンの考古学調査』昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 4 1997
9. 續紳一郎 1993・9 「ベトナム製焼締長胴瓶・四耳壺について—堺環濠都市遺跡の出土品を中心として—」『貿易陶磁器研究』No. 13 日本貿易陶磁器
10. 今井 敦 1993・2 『日本出土の舶載陶磁—朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム』東京国立博物館
11. タイ国芸術局考古学部 1990 『メナム・ノイ2号窯』 ※1989年, 1号窯, 2号窯の正式報告書である。形態分類すると同時にノイ川系陶磁器の世界的な交易に触れ堺環濠都市遺跡 SKT202 地点出土で硫黄の入ったノイ川窯系四耳壺も紹介している。
12. ベトナム古窯址調査団 二宮修治・網干守・山崎一雄 「北部および中部ベトナムで採集された陶磁器片の産地の考察」『同上』同上
13. 森本朝子・大橋康二 1992・7 「ベトナム・ビンディン省ゴーサイン2・3号窯の発掘調査」『東洋陶磁』第26号 東洋陶磁学会
14. 菊地誠一 1997・5 「中部ベトナムの陶磁生産と日本—16世紀～17世紀の日越交流—」『日本考古学協会63回総会』研究発表要旨 日本考古学協会
15. 金城亀信 1998・7 「首里城跡「京の内」跡出土の中国陶磁—国内初例の紅釉水柱が確認—」『陶説』第544号 日本陶磁学会
16. 森本朝子 1992・7 「博多出土のタイ陶磁について—アマラ・スリサッチャト氏に聞く—」『法蛤』第1号 博多遺跡研究会
17. 森本朝子 1992・7 「お日様マーク始末期—あるベトナム陶器をめぐる—」『法蛤』第1号 博多遺跡研究会
18. 財団法人大阪市文化財協会 1992・6 『難波宮址の研究』第9
19. 矢部良明 1978・8 『タイ・ベトナムの陶磁』陶磁大系 第47巻 平凡社
20. Don Hein, Mike Barbetti, Peter Grave 1989・3 「SOUTHEAST ASIAN CERAMICS: THE BURMUSE CONTRIBUTION」『Siam Society Letter』vol. 5 No. 1
21. 曾田雄亮 1998・10 「南章堺環濠都市遺跡出土遺物の蛍光X線分析結果報告」『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告—STK655 地点・戎之町西1丁30—』堺市文化調査概要報告第77冊 堺市教育委員会 ※ミャンマー白釉盤, ベトナム青花を分析した。
22. 矢島律子 1999・3 「堺環濠都市遺跡 (SKT655 地点) 出土のミャンマー・白釉盤片生産窯について」『長曾根遺跡発掘調査概要報告—堺市長曾根土地地区画整理事業に伴う発掘調査・V—「長曾根大溝」の調査』堺市文化財調査報告 第82冊 堺市教育委員会
23. 小学館 1984・6 『世界陶磁全集』16 南海
24. 備前焼紀年銘土型調査委員会・備前市教育委員会 1998・3 『備前焼紀年銘土型調査報告書』
25. 小畑弘己 1992・3 『博多30—博多遺跡群第60次発掘調査報告書—』福岡市埋蔵文化財調査報告第285集 福岡市教育委員会

26. 堺市役所 1930・6『堺市史 全八巻 第2巻 本編第二』
27. 松田毅一 1992・5『豊臣秀吉と南蛮人』朝文社
28. 塚原 博 1994・3「五島列島の貿易陶磁器出土遺跡」『長崎県の考古学—中・近世研究特集—』長崎県考古学学会
29. 高島豊・河野史郎・塩地潤一 1999・8『中世府内の館と町—最近の調査事例を中心として—』大分地方史第174号
30. 伊藤幸司 1998・8「大内氏の日明貿易と堺」『ヒストリア』第161号 大阪歴史学会
31. 朝尾直弘編 1991・6『第1巻 世界史のなかの近世』日本の近世 中央公論社
32. 福建省博物館 1997・1『漳州窯』福建省漳州地区明清窯址調査発掘報告第一
33. 森村健一 1996・2「国際貿易都市・堺における16世紀末～17世紀初頭の陶磁器」『堺衆のやきもの—堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』展図録 土岐市美濃陶磁歴史館
34. 森村健一 1991・11「Witte Leeuw'号の陶磁器(2)」『関西近世考古学研究II』関西近世考古学研究会
35. 町田市立博物館 1996・6『國分孝雄コレクション タイ・メソット出土緑絵のうつわ』
36. 檜崎彰一・H. Leedom Letterls Jr.・Lowise Allison Cort 2000・3「東南アジア本土における現状土器および焼締陶の生産に関する地域調査」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第8輯』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
37. 茶道資料館・MOA美術館 1998・10『交趾香合—福建省出土遺物と日本の伝世品—』
38. Louise Allison Cort 1993「Buried and Treasured in JAPAN Another Source for Thai Ceramic History」『Thai Ceramics The James and Elaine Connell Collection』Asian Art Museum of San Francisco
39. タイ芸術局考古学部 1997『バン・パンブン』タイ語の文献については、日本語訳にし佛曆を西曆に変えた。プッタ・サッカラート(佛曆)との差は543年である。
40. タイ芸術局考古学部 1991・11「タイ国シンプリ県ノイ川窯跡群発掘調査報告書」『関西近世考古学研究II』関西近世考古学研究会
41. 森村健一 1991・1「タイ国アユタヤの土器作り村(バン・プーモア)」『同上』同上
42. 菊地誠一 1998・4「近年のベトナム陶磁史研究の成果と課題」『物質文化 考古学民俗学研究』64 物質文化研究会
43. 乗岡 実 1999・12『中近世の備前焼播鉢の編年案』第11回関西近世考古学研究会大会レジュメ
44. 吉成承三 1995・3『高知県葉山村姫野城跡I—農山漁村活性化定住圏創造事業(公園整備)に伴う発掘調査報告書—』葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 葉山村教育委員会
45. 同上 1996・3『同上II』同上 第3集 同上
46. 前田敬彦編 1997・3『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』和歌山市教育委員会
47. 森村健一・森屋直樹 1996「日本大阪府堺市環濠都市遺跡出土の黒釉碗の編年と研究」『福建文博』No.2 総28期 中国古陶瓷研究会 1996年年会專輯 福建省博物館
48. 石井米雄・吉川利治 1987・8『日・タイ交流600年史』
49. 講談社 1995・12『クロニク戦国全史』
50. 尾形勇・岸本美緒 1998・6『新版 世界各国史3 中国史』
51. 石井米雄他 1986・7『東南アジアを知る事典』
52. 藤野保編 1995・3『論集幕藩体制史 第I期 <支配体制と外交・貿易> 第8巻 対外関係と鎖国』雄山閣出版
53. 藤野保編 1994・5『論集幕藩体制史 第I期 <支配体制と外交・貿易> 第1巻 織豊政権の成立』雄山閣出版
54. 田村晃一他 1999・3『鹿児島県大島郡宇検村倉崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書 第2集 宇検村教育委員会
55. 堺市教育委員会 1981～2000『環濠都市遺跡』報告書・概要
56. 中野良一・沖野新一・柴田圭子 1998・3『湯築城跡・道後公園埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書 第66集 愛媛県埋蔵文化財調査センター タイ・シーサッチャナーライ窯系鉄絵瓶と同類は、富山佐藤美術館、山青齋コレクション(図録No.38)にある。第2段階、屋敷地(区画)7出土のタイ陶磁器は、家臣団中最大の屋敷地を有する経済力を背景にした茶陶にみるステータスシンボルとして他の家臣との差がある。
57. 田島富慈美 1993・12「森太一氏による建設工事に伴う平野環濠都市遺跡発掘調査(HIV92-20)略報」『平成4

- 
- 年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
58. 吉岡康暢他 1998・3『陶磁器の文化史』国立歴史民俗博物館
59. 高島 豊 1998・12「中世大友城下町跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.9・1997年度
60. 松本啓子 1999・3「大坂城下町出土のオランダ壺の源流をもとめて」『大阪市文化財協会研究紀要第2号 鈴木秀典氏追悼論文集』財団法人大阪市文化財協会
61. 鋤柄俊夫・森毅 1999・3「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『同上』同
62. 森村健一 1992・4「堺環濠都市遺跡における中近世陶磁器余録—遺構と陶磁器の画期からみた中近世都市の発展」『東洋陶磁 第19号』東洋陶磁学会
63. 森村健一 2001・3「考古学からみた安土・桃山茶陶—堺出土の軟質施釉陶器—」『羽衣国文』第13号 羽衣学園短期大学
64. 嶋谷和彦 1992・3「中百舌島・長曾根遺跡発掘調査概要報告」堺文化財調査報告 第26冊 堺市教育委員会
65. 丸山雄二 2000・5「下村藤左衛門跡下層における天正大地震被災遺物の再検討」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』日本考古学協会
66. 定森秀夫 1995・9『平安左京六条三坊七町 京都市下京区小田原町・東鋸屋町』京都文化博物館調査研究報告 第11集 京都府京都文化博物館
67. 平戸市教育委員会 1993・3『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅳ 馬込遺跡の発掘Ⅰ 坊頭畑第3遺跡の発掘』平戸市の文化財 35
68. 扇浦正義 1996・3『新地唐人荷蔵跡—「ホテルJALシティー長崎」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長崎市埋蔵文化財調査協議会
69. 宮崎貴夫 1995・3『万才町遺跡 長崎県方新別館建設建替に伴う発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第123集 長崎県教育委員会
70. 扇浦正義 1997・3『築町遺跡—築町別館跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会
71. 堺市役所 1929・6『堺市史 全八巻 第4巻 資料編第一』
72. 岩生成一 1985・12『新版 朱印船貿易史の研究』吉川弘文館
73. 金武正紀 1993・3「舶載陶磁器からみた琉球の海外交易—中国陶磁器を中心として—」『第4回琉球史歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集』
74. 山本信夫・長谷部楽爾・青柳洋治・小川英文 1993「ベトナム陶磁の編年的研究とチャンパ古窯の発掘調査—ゴーサイン古窯址群の発掘調査—」『上智アジア学』第11号 上智大学アジア文化研究所
75. 金武正紀・島弘 1997・3『銘苅原遺跡 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ』那覇市文化財調査報告書 第35集 那覇市教育委員会
76. 徳永貞紹 1998・9「肥前神崎荘・松浦荘城の中世港湾と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
77. 宮崎貴夫 1998・9「長崎県地域の貿易陶磁の様相—肥前西部・壱岐・対馬—」『同上』同上
78. 橋口 亘 1998・9「長崎県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『同上』同上
79. 菊地誠一 1998・9「ベトナム中部の沈没船引き揚げ陶磁器」『同上』同上
80. Jeremy Green Rosemary Harper and Vidya Inttakosi 1987「The Maritime ARCHAEOLOGY of SHIP-WRECKS AND CERAMICS IN SOUTHEAST ASIA and THE KO SI CHANG THREE SHIP-WRECK EXCAVATION 1986」『Australian Institute for Maritime Archaeology Special Publication No.4』The Australian Institute for Maritime Archaeology
81. 尾崎直人 1992・9『ベトナムの陶磁』福岡市美術館
82. Barbara Harrisson 1986『PUSAKA Heirloom Jars of Borneo』
83. 青柳洋治 1992「交易の時代(9~16世紀)のフィリピン—貿易陶磁に基づく編年的枠組」『上智アジア学 第10号』上智大学アジア文化研究所
84. 平 雅行 1984・12「建武・室町政権と東アジア」『講座日本の歴史 3回 中世1』歴史学研究会・日本史研究会
85. 鶴田 啓 1995・12「貿易は東南アジアへ」『クロニク 戦国全史』講談社
86. 川島元次郎 1921・9『朱印船貿易史』巧人社
87. 亀井明徳 1997・7「東シナ海をめぐる交易の構図」『考古学による日本歴史 10 対外交渉』雄山閣出版
88. 豊田 武 1957「堺—商人の進出と都市の自由」日本歴史新書 志文堂
-

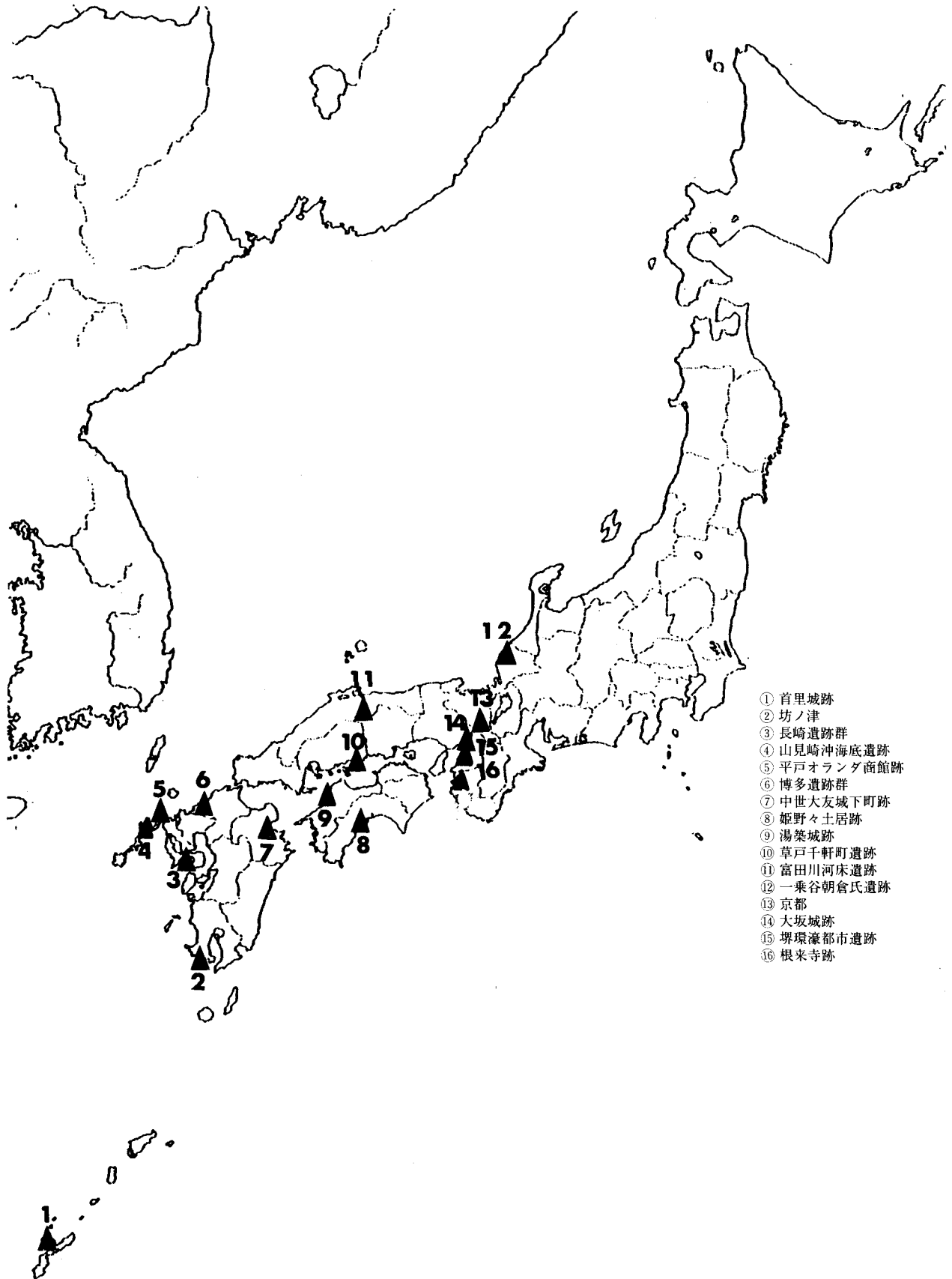
- 
89. Orlando, V. Abinon・森村健一 1996・5 「フィリピン沖沈没船からみた15世紀～17世紀初頭の交易」『日本考古学協会第62回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
90. 菊地誠一 1996・5 「ベトナム中部の「日本人町」ホイアンの発掘調査」『同上』同上
91. 田中健夫 1993・4 「遣明船と堺」『博多と堺』堺市博物館
92. 吉岡康暢 1997・2 「新しい交易体系の成立」『考古学による日本歴史 9 交易と交通』雄山閣出版
93. 桜井由躬雄 1991・7 「東南アジア近世の開始」『日本歴史 第1巻 世界史の中の近世』中央公論社
94. 森村健一 1998・10 「堺における貿易陶磁」『日本考古学協会 1998年度沖縄大会 発表資料』日本考古学協会
95. 藪内 清 1969・1 『天工開物』東洋文庫 130 平凡社
96. 角川書店 1990・5 『角川 茶道大事典』
97. 千宗左・千宗員 1998・10 『江岑 宗左茶書』主婦の友社
98. 金武正紀 1998・2 「陶磁器輸入の流れ」『陶磁器にみる大交易時代の沖縄とアジア』那覇市壺屋焼博物館
99. 金城亀信 1998・2 「輸入陶磁器の精華—首里城跡「京の内」跡の出土資料」『同上』同上
100. 尾崎直人 1998・2 「東南アジアの陶磁と沖縄」『同上』同上
101. 堺市博物館 1989・9 『山上宗二記』翻刻（酒井家本—堺市博物館蔵）『堺衆—茶の湯を創った人々』
101. 谷 晃 1995・10 『茶会記の風景』河原書店
102. 渡辺書店 1971・11 『今井宗久茶湯書抜 静嘉堂文庫本』
103. 西田宏子 1993・10 『南蛮・島物—南海請来の茶陶』
104. 土岐市美濃陶磁歴史館 2000・2 「大坂城出土の桃山陶磁 豊臣期のやきもの」展示図録
105. 財大阪市文化財協会 1999・3 「大坂城跡IV—谷町筋地下駐車場の建設に伴う大坂城跡発掘調査報告書」
106. 財大阪市文化財協会 1992・6 「難波宮址の研究 第9」
107. 和田久徳 1971・5 「東南アジアの社会と国家変貌」『内陸アジア世界の展開 II 南アジア世界の展開』岩波講座 世界歴史 13 岩波書店
108. Christophe Loviny 1996 『The Pearl Rodo Tales of Treasure Ships』
109. Franck Goddio 1994 『Le San Diego Un Trésor sous la mer』
110. Philippines National Museum 1993・10 『Saga of The San Diego』(A.D. 1600)
111. 金城亀信 1998・3 「首里城跡—京の内跡発掘調査報告書 (I)—」沖縄県文化調査報告書 第132集
112. 土岐市美濃陶磁歴史館 1993・2 『桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』
113. 森村健一 1995・3 「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」『東洋陶磁』第23・24号 東洋陶磁学会
114. 金城亀信 1998 「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器—紅釉水注を中心に—」『考古学ジャーナル No. 437』
115. 沖縄県今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城発掘調査報告 I』
116. 琉球政府文化財保護委員会 1966・11 「勝連城跡第二次発掘調査概要」『琉球文化調査報告書』
117. 沖縄佐敷村教育委員会 1980・3 『佐敷グスク—佐敷グスク発掘調査報告—』
118. RIJKS MUSEUM 1982 『THE CERAMIC LOAD OF THE 'WITTE LEEUW' (1613)』
119. 高良倉吉 1991・1 「東洋海上貿易史の琉球の位置」『中国与海上シルクロード 联合国教科文組シルクロード総合考察 泉州国際学術討論会文集』同左委員会 福建人民出版社
120. 青柳 勝 1987・1 「戦国・織豊期における堺・大坂商人の活動」『ヒトリア 第112号』大阪歴史学会
121. 前田書店 1977 『元禄二己巳歳・堺大絵図』
122. 嶋谷和彦 1996・10 「向泉寺跡遺跡発掘調査概要報告—KTA—3 地点・「向井領三味」墓地の調査」堺市文化財調査概要報告 第59冊 堺市教育委員会
123. 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1982・3 『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡 VIII—昭和56年度発掘調査整備事業概要—』福井県立朝倉氏遺跡資料館
124. 石井米雄 1999・11 『タイ近世史研究序説』岩波書店
125. プジョン・ナッタパトラ・チャントヴィ／吉良文男訳 1989 「ターク県山中で発見された古陶磁」『東洋陶磁』vol. 17 東洋陶磁学会
126. 山崎一雄・室住正世 1993 「タイミャンマー国境地域出土の白磁緑彩陶の性質と産地の考察」『東洋陶磁』vol. 20・21 東洋陶磁学会
127. 西田宏子 1995 「南蛮・島物—南海請来の茶陶」『東洋陶磁』vol. 23・24 東洋陶磁学会
-

128. 石井米雄 1995「交易時代のアユタヤ」『同上』同上
129. 森本朝子 1995「日本出土のベトナム陶磁とその産地」『同上』同上
130. 矢島律子 1995「ベトナム青磁について—その特色と問題点—」『同上』同上
131. 山本信夫 1995「ベトナム中部の陶磁生産と貿易—ゴーサイン窯跡群の発掘調査—」『同上』同上
132. 矢島律子 1999「ベトナム青花の変遷—文様を中心に—」『同上』同上
133. 沖縄県教育委員会 1993・3「湧田古窯跡(Ⅰ)—県庁分舎行政棟建設に係る発掘調査—」沖縄県文化財調査報告書 第111集
134. 吉武 学 1996・3「博多—博多遺跡群第80次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集 ※博多については1995年以降のみ参考文献に上げた。福岡市教育委員会
135. 大庭康時 1995・3「博多46—博多遺跡群第74次発掘調査概報—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第395集
136. 山口譲治 1995・3「博多47—第64次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第396集 福岡市教育委員会
137. 大庭康時 1995・3「博多48—博多遺跡群第62次調査の概要—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第397集 福岡市教育委員会 ※713号遺構からは文永2年(1265)銘龍泉窯系鎬蓮文弁文碗出土
138. 大庭康時 1996・3「博多49—博多遺跡群第87次調査の概要—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第443集 福岡市教育委員会
139. 下村 智 1996「博多53—博多遺跡群第71次調査の報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第450集 福岡市教育委員会
140. 大庭康時 1997・3「博多57—博多遺跡群第85次調査の概要—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第522集 福岡市教育委員会
141. 大庭康時 1998・3「博多64—博多遺跡群第98次調査の概要—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集 福岡市教育委員会
142. Charles Nelsom Spinks 1969『THE CERAMIC WARES OF SIAM』THE SIAM SOCIETY
143. Daniel J. Scheans 1977『FILI PINO MARKET POTTERIES』National MUSEUM MONOGRAPH No. 3 NATIONAL MUSEUM OF THE PHILIPPINES
144. Dawn F. Rooney 1986『THAI POTTERY AND CERAMICS —Collected articles from The Journal of the Siam Society 1922~1980』THE SIAM SOCIETY
145. THE ART GALLERY OF SOUTH AUSTRALIA 1977『THAI CERAMICS —BANG CHIANG KHMER SAWANKHALOK CERAMICS』
146. Sayan Prishanchit 1996「Maritime Trade During the 14th to 17th Century Evidence from the Underwater Archaeological Sites in the Gulf of Thailand」『Ancient Trades and Cultural Contacts in Southeast Asia』The Office of the National Culture Commission Bangkok Thailand
147. W. A. R. ウッド著 郡司喜一訳 1941・12『タイ国史』
148. The National Museum 1991・2『CHINESE AND SOUTHEAST ASIAN GREENWARE found in Philippines』

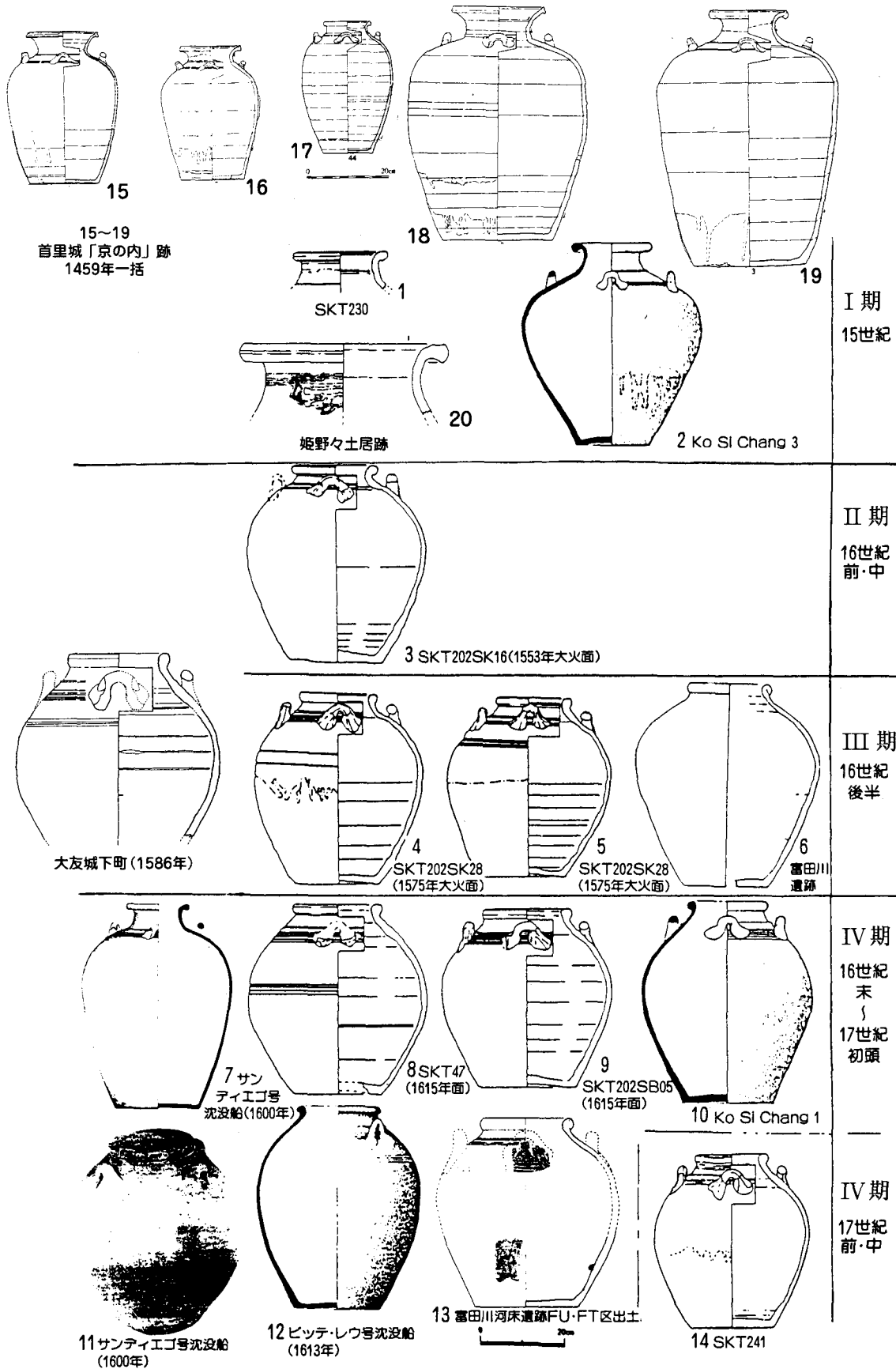
(堺市立埋蔵文化財センター, 国立歴史民俗博物館企画展協力者)

(2000年8月31日受理, 2001年6月22日審査終了)

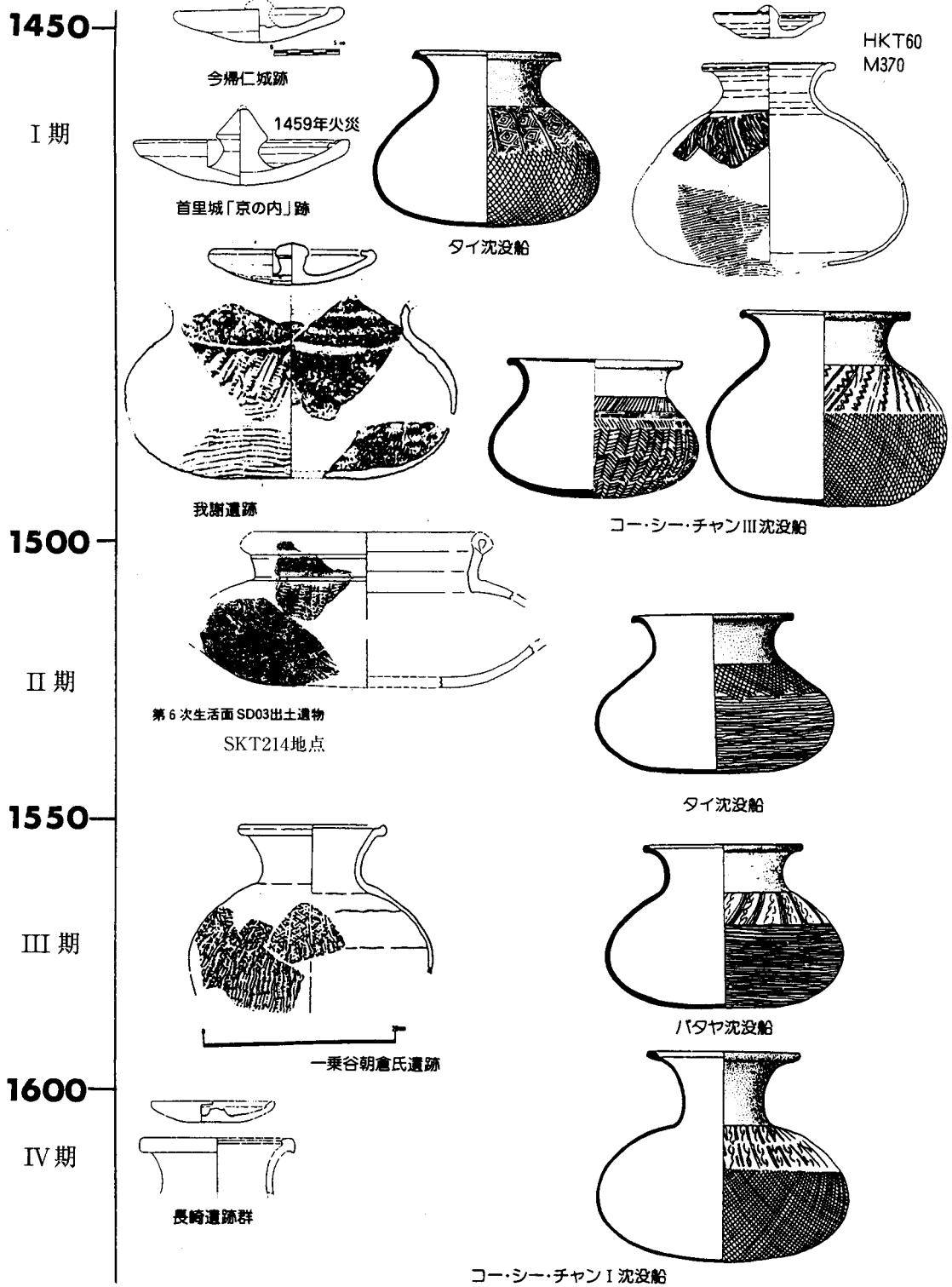




第1図 日本における主たる東南アジア陶磁器出土地点

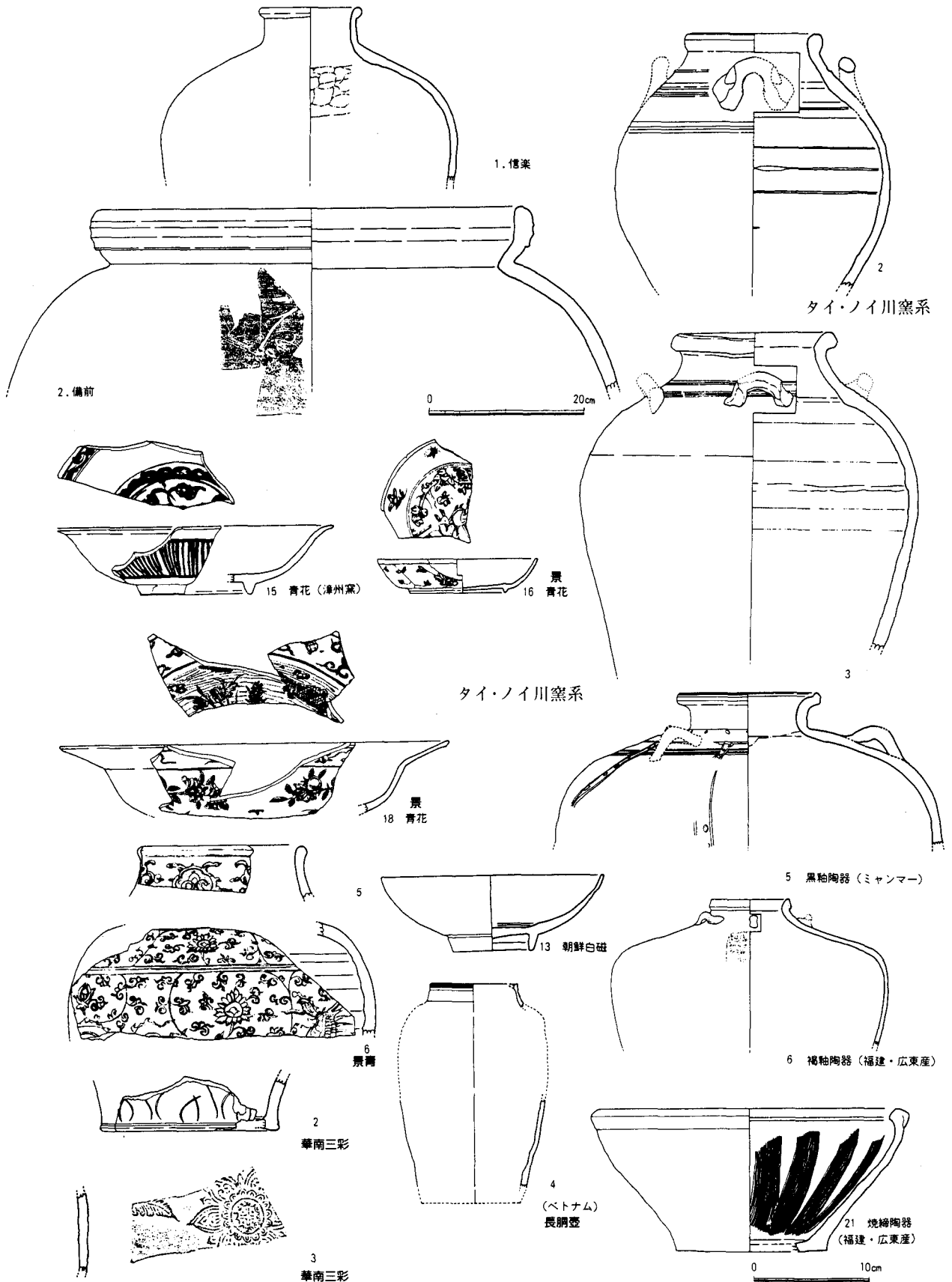


第2図 タイ・ノイ川系四耳壺編年 (\*タイプは同時期 10 タイプ報告書で分類されている)



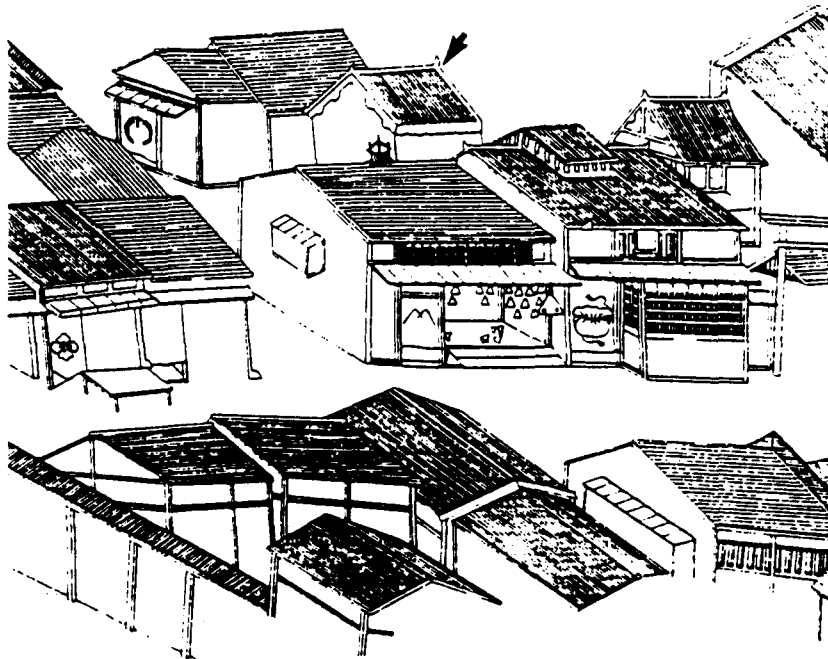
縮尺不同

第3図 アユタヤ窯系土師質壺編年

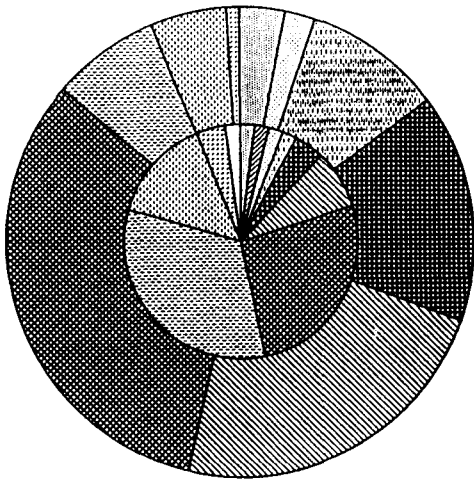


SX210 出土遺物

第4図 中世大友城下町跡第3次調査 (1586年一括品) 埋蔵遺構群内出土 (報告書より)

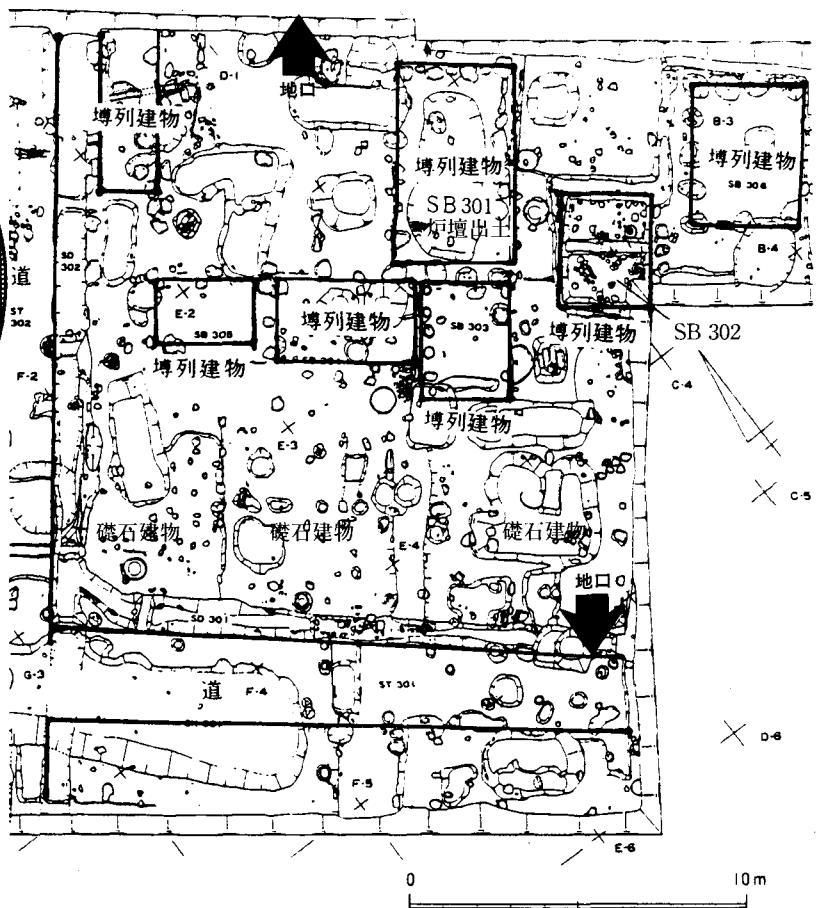


住吉・堺祭礼図(トレース)ー1605年前後の堺ー  
 ※矢印が三階倉(博列建物) = 蔵座敷 = 茶室



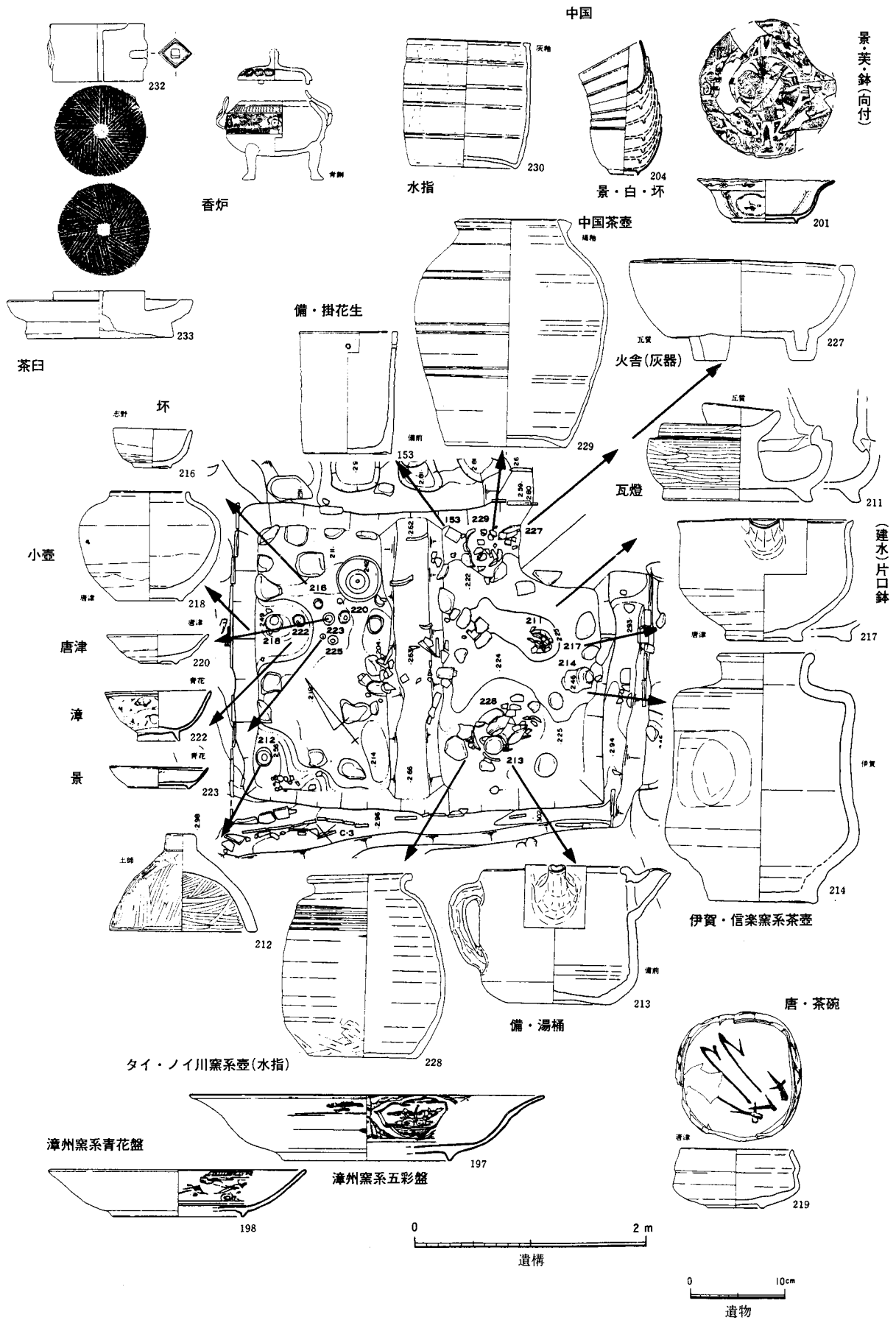
御坊之内分		御坊之内堀跡	
四坪以下	3   3.2%	1   2.0%	
六坪以下	0   0.0%	1   2.0%	
八坪以下	2   2.1%	1   2.0%	
十坪以下	9   9.5%	1   2.0%	
十五坪以下	15   15.8%	2   4.1%	
二十坪以下	22   23.2%	4   8.2%	
三十坪以下	31   32.6%	13   26.5%	
四十坪以下	7   7.4%	16   32.7%	
七十坪以下	5   5.3%	7   14.3%	
百坪以下	1   1.1%	2   4.1%	
百坪以上		1   2.0%	
合計	95	49	

文禄3年(1594)九間町検地帳に  
 みる坪数表

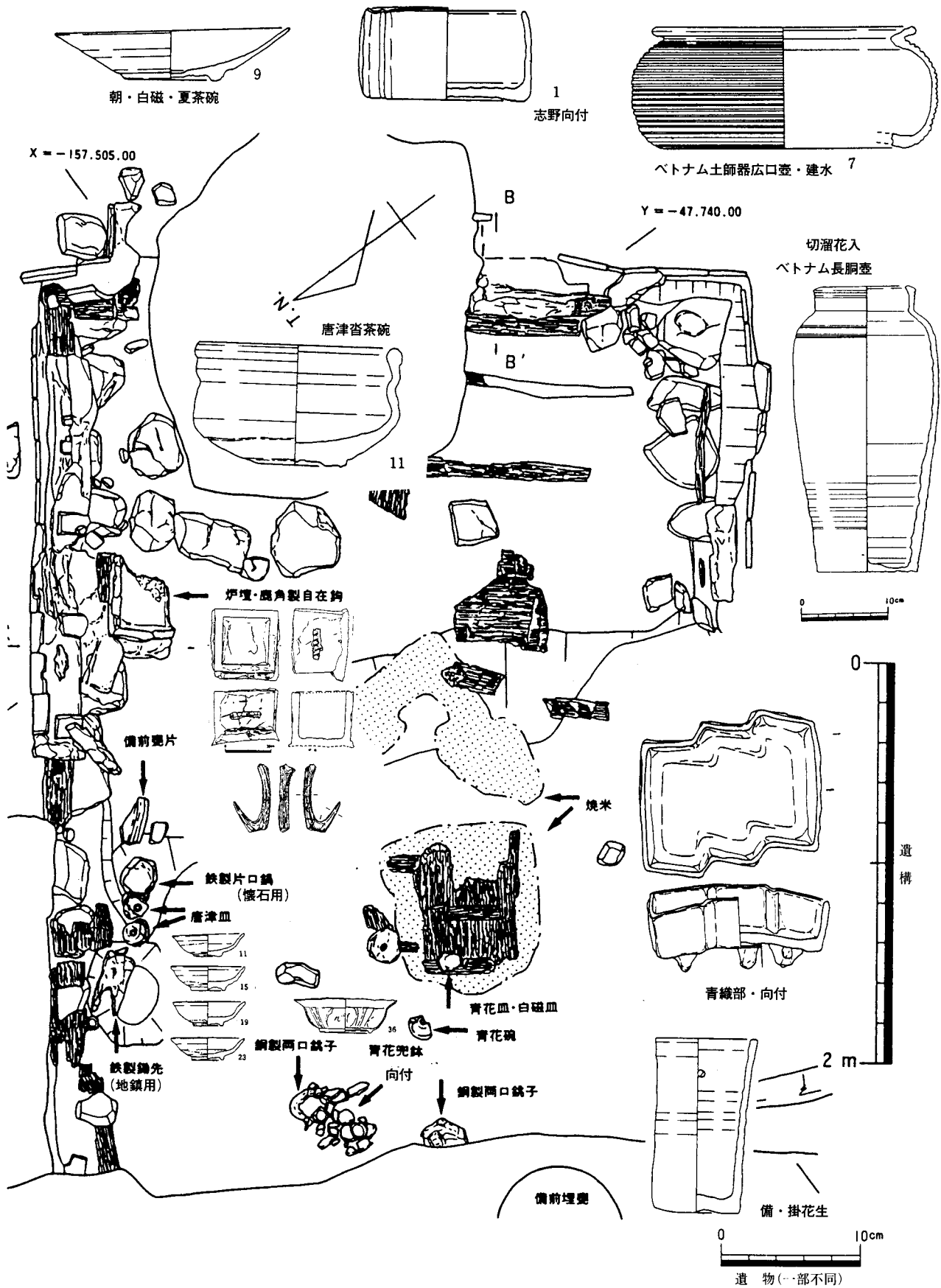


SKT39 地点 SB301 博列建物 (1596~1615年比定)

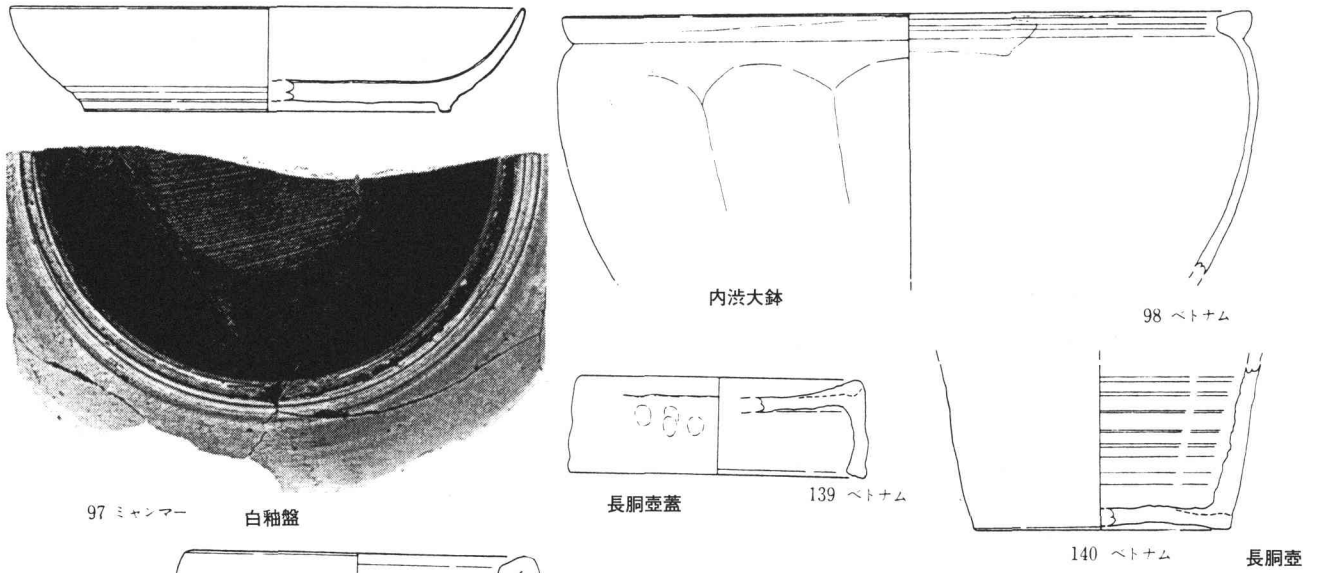
第5図 堺環濠都市遺跡屋敷地



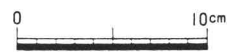
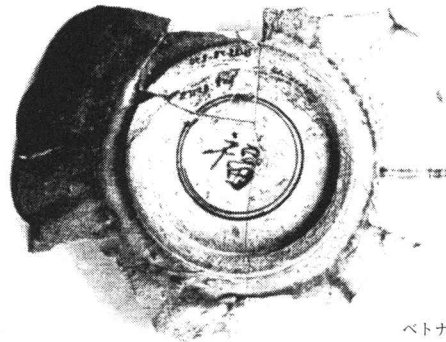
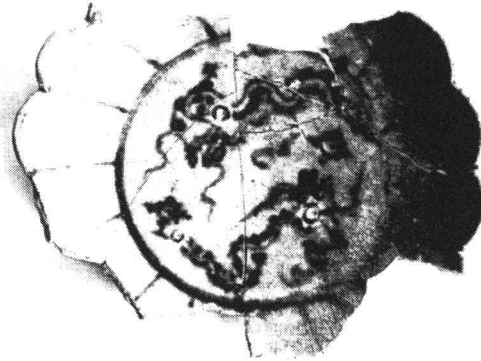
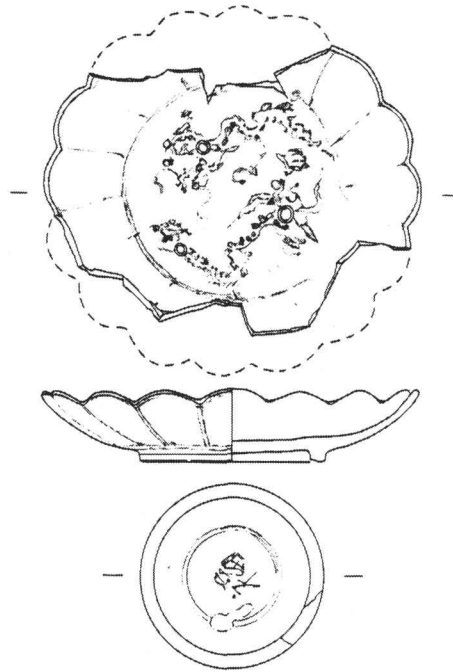
第6図 SKT39 地点第3 生活面埦列建物・SB302 茶陶出土状態



第7図 SKT230 地点第2次生活面SB01 埴列建物=茶室遺構図・茶陶一括品



97・98・第3次整地層（1585年頃～1596年）  
 138～40・第4次整地層（1575年頃～1585年）  
 SKT655 地点・戎之町西1丁30

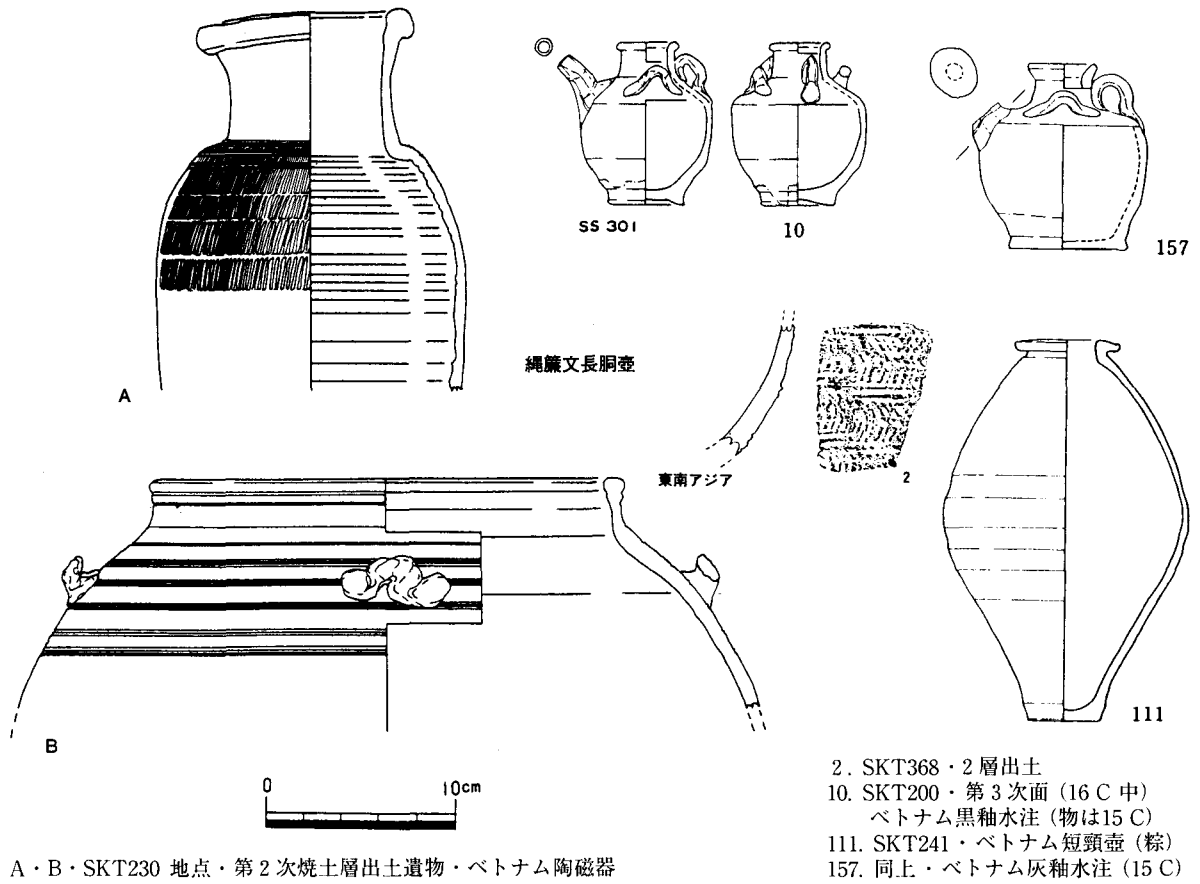


ベトナム

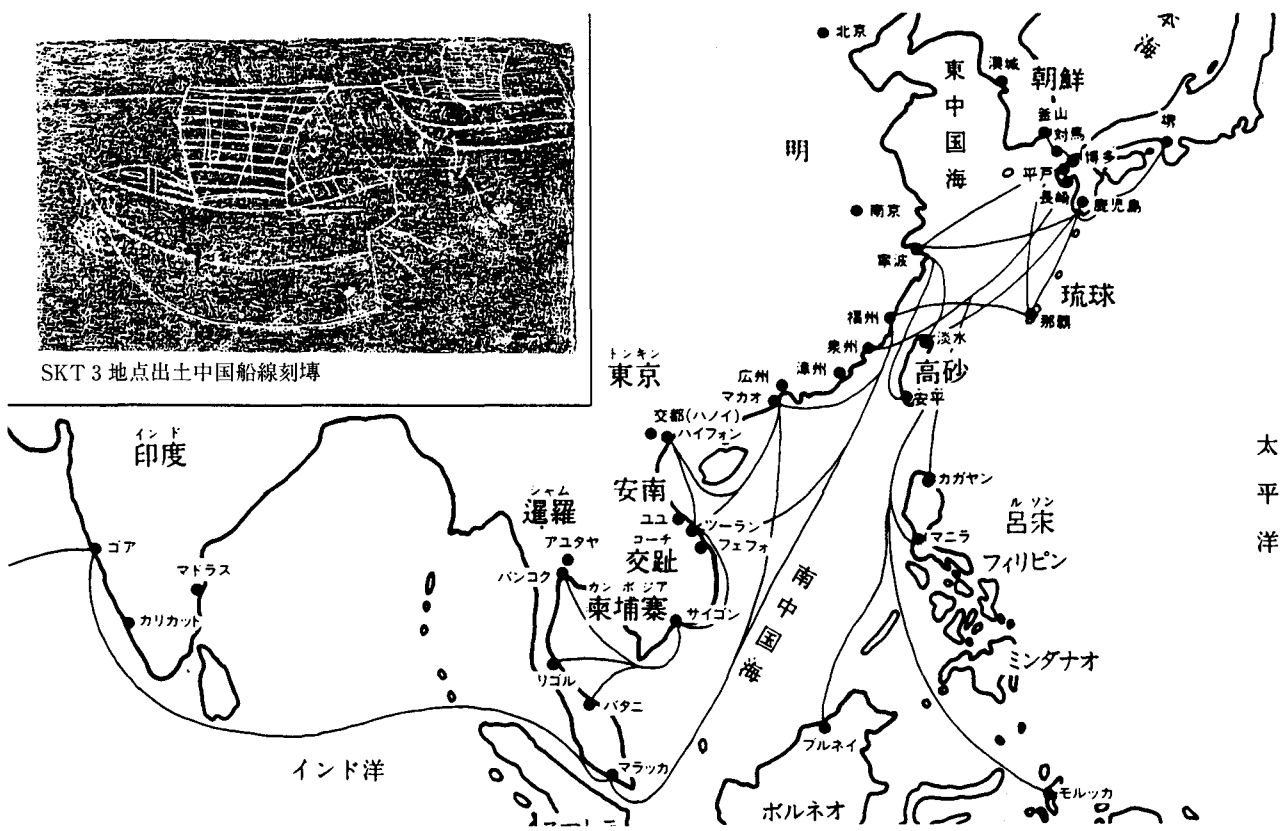
SKT528 地点出土青花双龍文輪花皿（17世紀後半～18世紀前半）

第8図 SKT528, 655 地点出土東南アジア陶磁器（報告書より）





第9図 堺環濠都市遺跡出土東南アジア陶磁器



第10図 15~17世紀の東アジア・東南アジアにおける貿易ルート

資料1 日本の遺跡出土の東南アジア陶磁器

※堺環濠都市遺跡については別表に記した。全リストではない。

時期	年代基準遺跡	出土遺跡・種類・窯跡 ( ) は破片数または個体数	東・東南アジア諸国の政治的動向
14世紀中葉～15世紀後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>堺環濠都市遺跡(SKT)「応永大火」(1399年)生活面</li> <li>紀淡海峡、深日沖沈没船(1467～1477年?)一括品</li> <li>タイ、タイ湾 コー・クラン沈没船(15世紀後半代青銅製砲弾)</li> <li>コー・シー・チャン III 沈没船(C14-1410年±70年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長崎県平戸オランダ商館跡 902 地区第5区 シ・サッチャナライ窯系大型香合蓋 15世紀(1)(III 期面出土)</li> <li>博多遺跡群(HKT) R-1 SK55 シ・サッチャナライ窯系青磁双耳瓶(1) 15世紀</li> <li>HKT40 SD12 スコタイ鉄絵陶器盤 15世紀(1)</li> <li>HKT42 シ・サッチャナライ窯系白釉鉄絵唐草文瓶 15世紀(1)</li> <li>HKT60 M24 R49 シ・サッチャナライ窯系黒褐釉双耳瓶 15世紀(1)</li> <li>HKT60 包E-15 R998 シ・サッチャナライ窯系黒褐釉双耳瓶 15世紀(1)</li> <li>HKT42 II-0423 アユタヤ窯系土師質壺蓋 15世紀(1)</li> <li>HKT60 包A-F15-18 R993 アユタヤ窯系土師質壺蓋 15世紀(1)</li> <li>HKT60 M370 R996 アユタヤ窯系土師質壺 15世紀(1)</li> <li>HKT60 M 包・C・D R637 ランブーン(ハリブンチャイ)窯系長頸壺(1) 14世紀(14世紀後半生活面出土)</li> <li>HKT2 V 面 D-13区 スパンブリ蓮弁文大甕(1) 14,15世紀</li> <li>福岡県久留米市安武地区遺跡群今泉遺跡 C-SD130 1990 ノイ川窯系四耳壺 15世紀後半(1)</li> <li>佐賀県唐津市菜畑松円寺山遺跡 スコタイ鉄絵魚文鉢 15世紀中葉(1)</li> <li>沖縄県 ◎アユタヤ窯系土師質壺蓋 15世紀 今帰仁グスク(87) 首里グスク(9) 勝連グスク(7) 浦添グスク(7) 越來グスク(7) 山田グスク(2) 佐敷グスク(2) 我謝遺跡(3) 新富祖遺跡(3) 伊是名グスク(1) 御細工所跡(1) 糸数グスク(2) 那覇港埋立地(5) 伊原遺跡(1) フェンサ城貝塚(2) ◎アユタヤ窯系土師質壺 首里グスク(2) 佐敷グスク(1) 我謝遺跡(1) 阿波根古島遺跡(4) 北谷城第7遺跡(1)</li> <li>今帰仁グスク ◎シ・サッチャナライ窯系 鉄絵、香合蓋(5) 身(18) 壺(1) ケンディ(1) 黄青釉陶器(21) ヒニグスク シ・サッチャナライ窯系香合(3) ノイ川窯系四耳壺 I型(2) 第IX型(1)</li> <li>城辺町友利遺跡 タイ陶磁器 (窯?)(1)</li> <li>伝石川県大沢海岸出土 シ・サッチャナライ窯系(?) 灰陶器壺(1)</li> <li>伝愛知県宝飯郡一宮町金沢 シ・サッチャナライ窯系(?) 白釉三耳壺 15世紀(1)</li> <li>長崎遺跡群 栄町1-15地点 G51-9 灰釉鉄絵 唐獅子像(ガルダ?) 15世紀(1)</li> <li>長崎遺跡群 万才町高嶋邸跡 シ・サッチャナライ窯系青磁壺蓋 15世紀(1)</li> <li>大阪淀川河川敷遺跡 シ・サッチャナライ窯系鉄絵香合 15世紀</li> <li>一乗谷朝倉氏遺跡 シ・サッチャナライ窯系青磁碗 15世紀</li> <li>HKT3 包 ベトナム青磁 15世紀</li> <li>HKT98 盛土層 タイ? 15世紀?</li> <li>HKT85 包 タイースコタイ魚文盤 15世紀(B-2-472)</li> <li>HKT71 1 面下包含層 D-6区 タイースコタイ鉄絵盤 15世紀</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>元→明(1368年)</li> <li>高麗→朝鮮王朝(1392年)</li> <li>南北朝→室町時代(14世紀末)</li> <li>スコタイ→アユタヤ(1378年)(1351年建国)</li> <li>ベトナム・胡朝, 明に滅ぼされる(1400～1407年)</li> <li>明国, 海禁政策をとる(1368年)→倭寇の活動</li> <li>日本, 南北朝動乱(1399年)・応仁の乱(1467～1477年)</li> <li>ベトナム, 黎朝建国(1428～1527年)</li> <li>「歴代宝案」によると1425～1564年までは毎年、琉球国から暹羅国へ派船している</li> </ul>
16世紀中葉～16世紀後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>愛知県香掛城跡 池 SG01 「天文17年」(1548) 銘木札一括品</li> <li>堺環濠都市遺跡 1553年焼失面 1575年焼失面</li> <li>根来寺 1585年焼失面</li> <li>一乗谷朝倉氏遺跡 1573年焼失面</li> <li>大坂城下町遺跡 石山本願寺期(1580年以前)</li> <li>滋賀県小谷城跡 (1573年又は1576年廃城)</li> <li>タイ、タイ湾 コー・カラダ沈没船 嘉靖(1522～1566年)銘青花碗</li> <li>大分市中世大友城下町 島津侵攻1586年</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長崎県五島列島小値賀町山見崎沖海底遺跡(沈没船) 16世紀後半 ノイ川窯系四耳壺(3個体) 陶器臼</li> <li>一乗谷朝倉氏遺跡 アユタヤ窯系土師質長頸壺(1573年) ノイ川窯系四耳壺(1)</li> <li>小谷城跡 ノイ川窯系四耳壺(2) (1573年・1576年)</li> <li>兵庫県伊丹市有岡城跡(1) (1579年以前) ノイ川窯系四耳壺(1)</li> <li>愛媛県松山市道後湯築城跡 16世紀後半 第III層(炭層) ノイ川窯系四耳壺(1) ノイ川窯系長頸四耳壺(ノイ川窯跡報告分類第I型)</li> <li>富田川河床遺跡 9NTDET区 1981年 ノイ川窯系四耳壺(1) 16世紀後半</li> <li>富田川河床遺跡 第7次FU・FT区 1981年 ノイ川窯系四耳壺(1) 16世紀後半</li> <li>長崎遺跡群 栄町1-15地点 G54-2 ノイ川窯系四耳壺(1) 16世紀後半</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>川中島の戦い(1555年)</li> <li>織田信長入京(1559年)</li> <li>桶狭間の戦い(1560年)</li> <li>本能寺の変(1582年)</li> <li>信長→秀吉時代(1582年)</li> <li>ビルマ, アユタヤを占領(1569～1584年)</li> </ul>

時期	年代基準遺跡	出土遺跡・種類・窯跡 ( ) は破片数または個体数	東・東南アジア諸国の政治的動向
16世紀中葉～16世紀後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>愛知県香掛城跡 池 SG01 「天文17年」(1548) 銘木札一括品</li> <li>堺環濠都市遺跡 1553年焼失面 1575年焼失面</li> <li>根来寺 1585年焼失面</li> <li>一乗谷朝倉氏遺跡 1573年焼失面</li> <li>大坂城下町遺跡 石山本願寺期(1580年以前)</li> <li>滋賀県小谷城跡 (1573年又は1576年廃城)</li> <li>タイ、タイ湾 コー・カラダ沈没船 嘉靖(1522～1566年)銘青花碗</li> <li>大分市中世大友城下町 島津侵攻1586年</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>同上 同上 ベトナム鉄絵盤 15世紀</li> <li>同上 同上 A-4区 ベトナム鉄絵盤 15世紀</li> <li>HKT87 包 ベトナム灰黄緑釉菊弁文碗 チョコレートボトム(2面 111号遺構と同一個体?) 15世紀</li> <li>HKT64 第32号溝 ベトナム青磁碗 チョコレートボトム 15世紀</li> <li>同上 SX-37 ベトナム鉄絵鉢 15世紀</li> <li>同上 同上 ベトナム鉄絵壺(第2面 SK-59と同一個体) 15世紀</li> <li>同上 第2面 SK-49,105 SD-76,85 ベトナム鉄絵盤 15世紀</li> <li>HKT35 SD20 ベトナム牡丹文印花白磁碗 15世紀前半～中頃</li> <li>同上 同上 ベトナム青磁碗 同上</li> <li>同上 同上 タイ黒釉壺? 同上</li> <li>同上 包 タイースコタイ鉄絵碗 15世紀</li> <li>同上 第1層 包 ベトナム白磁皿 15世紀</li> <li>同上 同上 ベトナム鉄絵唐草文盤(?) 15世紀</li> <li>同上 SE16 ベトナム鉄絵印花文碗 15世紀 チョコレートボトム</li> <li>HKT74 060号 ベトナム白地鉄絵皿(?) 16世紀</li> <li>HKT80 包 ベトナム鉄絵鉢(?) 15世紀(896)</li> <li>HKT60 包 ベトナム鉄絵花文碗 15世紀 チョコレートボトム</li> <li>同上 包 ベトナム青花皿 15世紀</li> <li>同上 113号土坑 ベトナム鉄絵盤 15世紀</li> <li>同上 包 ベトナム褐釉印花碗 15世紀</li> <li>同上 包 ミャンマー黒釉列点文壺</li> <li>首里城 京の内跡 1459年 タイーアユタヤ窯系土師質壺蓋(67) ベトナム青花(3) タイーノイ川窯系四耳壺(76)</li> <li>唐津市佐志中遺跡 ベトナム白磁絞花皿 ベトナム鉄絵唐草文壺 15世紀</li> <li>伊万里市川内野遺跡 ベトナム鉄絵草花文皿 15世紀</li> <li>坊津町泊海岸 ベトナム鉄絵菊花文皿 チョコレートボトム 15世紀</li> <li>那覇市銘苅原遺跡 アユタヤ窯系土師質壺蓋(60) タイーノイ川窯系四耳壺(32) 15世紀</li> <li>那覇市湧田古窯跡 タイーノイ川窯系陶器臼 ノイ川窯系四耳壺 タイーシ・サッチャナライ窯系鉄絵香合蓋(4) 小壺(2) 15世紀後半</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>川中島の戦い(1555年)</li> <li>織田信長入京(1559年)</li> <li>桶狭間の戦い(1560年)</li> <li>本能寺の変(1582年)</li> <li>信長→秀吉時代(1582年)</li> <li>ビルマ, アユタヤを占領(1569～1584年)</li> </ul>

時期	年代基準遺跡	出土遺跡・種類・窯跡（ ）は破片数または個体数	東・東南アジア諸国の政治的動向
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀県長浜市長浜町遺跡 1586年 天正地震面</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿児島県 ノイ川窯系黒褐釉壺 知覧城跡本丸跡(1) 蔵之城跡(1) 大堀迫遺跡(2)</li> <li>・大分市中世大友城下町 第3次調査 SX210 タイノイ川窯系四耳壺(9) ベトナム長胴壺(1) ミャンマー黒釉列点文三耳壺</li> <li>・湯築城跡 2段階 区画1 タイノイ・サッチャナライ窯系パン・コノイ窯鉄絵瓶(2)</li> </ul>	
16世紀末～17世紀初頭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国 江西省広昌県明代紀年墓 1608年, 1621年銘出土青花</li> <li>・タイ, タイ湾 バタヤ沈没船 万暦(1573～1620年)銘青花碗</li> <li>・コー・シー・チャンI沈没船 芙蓉手青花碗(1600～1615年)(C14・グッチェ・レウ号沈没船同類青花出土)</li> <li>・静岡県駿府城跡 三ノ丸SX01 「元和3年」(1617年)木札一括品</li> <li>・グッチェ・レウ号沈没船(1613年)</li> <li>・堺環濠都市遺跡 大坂夏の陣元和 大火面(1615年)</li> <li>・慶長伏見大地震面(1575～1596年)</li> <li>・「文禄」(1592～1595年)銘高嶋観一 括品</li> <li>・SKT47地点「天正10年」(1582年) 銘和泉砂岩板碑一括品</li> <li>・SKT19地点 SF001(堀) 天正13年銘木札(1585～1600年頃)</li> <li>・平戸オランダ商館跡 石垣築造埋土一括品(1609～1616年)</li> <li>・大坂城下町遺跡 豊臣前期(1583～1598年) 後期(1598～1615年)</li> <li>・石川県金沢兼六公園 江戸町跡 第3遺構面(1601～1622年)</li> <li>・大坂城下町遺跡 魚市場跡地点 「元和6,7」(1620, 1621年), 木札(1615～1622年)一括品</li> <li>・愛知県朝日西遺跡 「文禄2年」(1593年) 黄瀬戸丸碗 「慶長3, 4年」(1598, 1599年)銘板卒塔婆一括品</li> <li>・清洲城下町遺跡 SD52(環濠) 「天正14年(1586)」銘丸瓦 天正13年(1585)大地震面</li> <li>・京都 左京内膳町跡 「慶長9年(1604)」木札一括品</li> <li>・奈良県 奈良奉行所跡 1603～1604年建設</li> <li>・兵庫県 姫路城下町本町遺跡(1601～1609年)</li> <li>・福岡県博多遺跡群(40, 60次) 1586年島津氏焼土面 1587年豊臣秀吉町割面</li> <li>・長崎県長崎遺跡群 1592年, 1597年町割り面</li> <li>・フィリピン・サンディエゴ号沈没船(1600年12月14日)青花芙蓉手初見</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大坂城下町遺跡 OS92-25地点(1) ノイ川窯系四耳壺(1615年前後)</li> <li>・OS86-20 道修町 ノイ川窯系四耳壺(2) 17世紀前半</li> <li>・OJ92-18地点 ノイ川窯系四耳壺(4) 1615年面に類似する</li> <li>・長崎遺跡群 万才町(高嶋邸) ノイ川窯系四耳壺(36) アユタヤ窯系土師質壺(6)</li> <li>・長崎遺跡群 栄町1-15地点 G48-18, G-57-6 ノイ川窯系四耳壺(2)</li> <li>・長崎遺跡群 栄町G-51-12 アユタヤ窯系土師質壺蓋</li> <li>・長崎遺跡群 栄町G-29-4 アユタヤ窯系土師質壺蓋</li> <li>・長崎遺跡群 興善町(八尾邸跡) アユタヤ窯系土師質壺(5) ノイ川窯系四耳壺(1)</li> <li>・平戸オランダ商館跡 902地点 第5層 ノイ川窯系四耳壺(1) 1609年前後</li> <li>・OS中央体育館 SK457 ベトナム白磁皿 1580～1598年</li> <li>・同上 SK624 同上 同上</li> <li>・同上 SK507 同上 同上</li> <li>・OS造幣局 3a層 ベトナム土師質広口壺(ノ切) 1598～1615年</li> <li>・大阪市 ST94-7次 SE201 ベトナム長胴壺蓋 1598～1615年</li> <li>・長崎市万才町遺跡 県庁新別館 SK128 ベトナム長胴壺 17世紀初頭, SK205 タイノイ川窯系四耳壺 17世紀初頭, SK07 ベトナム長胴壺蓋 17世紀初頭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秀吉の全国統一(1583～1592年) それによる戦乱</li> <li>・文禄, 慶長の役(1592～1597年)</li> <li>・慶長伏見大地震(1596年)</li> <li>・関ヶ原の戦い(1600年)</li> <li>・大坂冬の陣(1614年)</li> <li>・大坂夏の陣(1615年)</li> <li>・豊臣氏→徳川幕府(1603～1615年)</li> <li>・ベトナムと鄭氏と阮氏の抗争(1627～18世紀)</li> <li>・中国 明→清 混乱期</li> </ul>

時期	年代基準遺跡	出土遺跡・種類・窯跡（ ）は破片数または個体数	東・東南アジア諸国の政治的動向
17世紀中葉～17世紀後半	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大坂城下町遺跡 道修町大火面(1708年) 妙知焼け大火面(1724年) マイケル・ハッチャI沈没船(1643～1646年)</li> <li>・長崎遺跡群(1641年面)</li> <li>・富田川河床遺跡 1981 IP区 SB020</li> <li>・「寛永21」(1644年) 銘木札と一括品</li> <li>・宮城県仙台城 三ノ丸跡II区6号土坑 第3層出土 「元和」銘木札と一括品 I期伊達政宗時代(1601～1637年頃)</li> <li>・SKT14地点 SF01一括品 (1636～1647年)</li> <li>・ベトナム, コンダオ島沖ウンタウ積荷沈没船(1690年)一括品</li> <li>・マイケル・ハッチャII沈没船(1752年)</li> <li>・中国 江西省広昌県明代紀年墓 1631年, 1645年出土青花芙蓉手</li> <li>・中国 福建省 章浦県明代紀年墓 1645年, 1701年出土青花芙蓉手</li> <li>・江戸遺跡 天和2年(1682) 明暦3年(1657) 大火面</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大坂城下町道修町小西邸 OJ92-18地点 ノイ川窯系四耳壺(6以上) 17世紀中葉, SK01 ベトナム鉄絵菊花文印判碗(10) 1724年大火</li> <li>・高槻城三ノ丸跡 高槻市立第一中学校用地 ノイ川窯系四耳壺(1) 17世紀中葉</li> <li>・八尾市安中町八尾近世墓 ノイ川窯系四耳壺(1) (1669～1888年) 17世紀後半～</li> <li>・東大阪市水走 沢田家所蔵 ノイ川窯系四耳壺(1) 17世紀中葉</li> <li>・HKT60 M35 R186 ノイ川窯系四耳壺(1) 17世紀中葉</li> <li>・HKT5 1面 包 ベトナム鉄絵菊花文印判文碗(2) 17世紀後半～18世紀前半</li> <li>・HKT3 包 同上(1) 同上</li> <li>・HKT98 表採 同上(1) 同上</li> <li>・京都市中之町 東南アジア陶器宝珠つまみ蓋 17世紀前半</li> <li>・OS97-1次 包 タイ三耳壺(?) 17世紀後半出土</li> <li>・大阪市 HN92-20 ベトナム波状文長胴壺 17世紀中葉</li> <li>・長崎市築町遺跡 1・3区焼土1層 ベトナム長胴壺蓋 ベトナム長胴壺 17世紀中葉</li> <li>・京都市 平安京左京六条三坊七町 SK707 ベトナム長胴壺, SK854 タイノイ川窯系四耳壺 17世紀中～後半</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国 明→清(1664年) (清1616年建国) 混乱期</li> <li>・平戸, オランダ商館(1609～1641年)</li> <li>・長崎(1641年～)での国家管理貿易</li> <li>・暹羅船, 長崎に入港(1679～1756年まで毎年来船)</li> </ul>

資料2 堺環濠都市遺跡出土タイ陶磁器一覧表

番号	地点番号	層位・遺構	種類	時期	報告書名	挿図
1	SKT3	1615年面	ノイ川窯系四耳壺	16C末～17C初	報15	第104図-中段左上
2	SKT47	第2次生活面 SB04	同上	同上	報35	第95図-23
3	SKT60	第2層	シ・サッチャナライ窯系パ ン・コノイ窯鉄絵香合	16C末～1615年	報21	第96図-67
4	SKT61	第2焼土層	同上	同上	報23	第56図-14
5	SKT78-2	第3層 B-3	土師質壺(中国?)	16C末	概61	なし
6	SKT179	更科・喫茶アポロ前	ノイ川窯系四耳壺	1615年?	概7	第57図-2
7	SKT202	第1次生活面 SK11	同上	17C中(遺構-17C後半～)	概49	第29図-1
8	SKT202	第2次生活面 SB05	同上	16C末～1615年	同上	第44図
9	SKT202	第2次生活面 SK16	同上	同上	同上	第51図
10	SKT202	第3次生活面 SK28- ①	同上(硫黄入る)	同上	同上	第56図
11	SKT202	第3次生活面 SK28- ②	同上(硫黄入る)	同上	同上	第57図
12	SKT214	第3次焼土層	同上	同上	概25	第24図
13	SKT214	第6次生活面 SD03	土師質壺(中国?)	16C前半	同上	第58図
14	SKT230	第5次生活面 SB14	ノイ川窯系四耳壺	15C後半～16C初	概14	第41図-10
15	SKT230	第5次生活面 焼土層	同上	同上	同上	第40図-2
16	SKT241	西壁面 17C中の生活 面埋土	同上	17C中	概8	第43図-105
17	SKT361	第2層	同上	16C末～1615年	概40	第26図-2
18	SKT368	第2次面落ち込み	土師質壺(綾杉文タタキ目)	同上	概47	第20図-2
19	SKT368	SS202床面	東南アジア長頸壺	同上	同上	第12図-2
20	SKT368	同上	同上	同上	同上	第12図-3
21	SKT372	B地区 第1層	ノイ川窯系四耳壺	17C中	概34	第17図
22	SKT411	機械掘削時	同上	17C初	概41	第23図-37
23	SKT421-1	2区 第8次整地層	同上	15C後半～16C初	概42	第17図-12
24	SKT611	第3層	同上	16C末	概65	第12図-80
25	SKT655	F-5・G-5 第4次整 地層	ノイ川窯系四耳壺	16C末	概77	第17図-138
26	向泉寺跡KTA3	SI299	同上(口縁部:人為的カット)	1636年～17C中	概59	図版6(写真のみ)
27	SKT590	SK1001	ノイ川窯系四耳壺	16C末～1615年	概75	第36図-163・図 版12
28	SKT573	第1焼土	ノイ川窯系四耳壺	同上	同上	第48図-310
29	SKT702	瓦囲い遺構	ノイ川窯系四耳壺	同上	概83冊	第13図-48
30	SKT702	江戸大土坑	ノイ川窯系四耳壺	同上	同上	第13図-49
31	SKT241	1615年面?	ノイ川窯系四耳壺	同上	同上	
32	SKT241	同上	ノイ川窯系黒褐釉四耳壺	同上		
33	SKT241	同上	アユタヤ窯系蓋	同上		
34	SKT241	同上	ノイ川窯系四耳壺	同上		
35	SKT505	1615年面	シ・サッチャナライ窯系大 型鉄絵香合	1596～1615年	大阪府調査	
36	SKT505	17世紀中葉	ノイ川窯系四耳壺		同上	

資料3 堺環濠都市遺跡出土ベトナム・ミャンマー陶磁器一覧表

番号	地点番号	層位・遺構	種類	時期	報告書名	挿図
1	SKT3	第2層	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	報15集	p.85 76図
2	SKT3	第4層	ベトナム青花雲気文皿	16C後半	同上	p.90 81図
3	SKT20	南壁セクション	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	報20集	第252図-9
4	SKT21		ベトナム焼締長胴壺	16C末～17C初	同上	p.483 第305図-1
5	SKT39	第2層	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	概15	第27図-91
6	SKT39	第3層	同上	同上	同上	第27図-98
7	SKT39	SB302(蔵)	東南アジア焼締壺(水指)	16C末～1615年	同上	第35図-228
8	SKT39	D-5 第3面	東南アジア焼締水注	同上	同上	第38図-301
9	SKT43		ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	概62	第17図-182
10	SKT47	SB09(蔵)	白磁印花文碗	16C末～1615年	報35	第101図-2
11	SKT47	SB04	ベトナム青花盤?	16C末～1615年	報35	原色図版12・右上 第102図, p.93
12	SKT112	第7層	ベトナム青磁蓮弁文碗	14C中～1399年	報41	第68図-1
13	SKT151	下水立会	ベトナム白磁印花文碗	16C末～1615年?	報46	第163図-33
14	SKT153	SF02(堀)	ベトナム白磁輪花文皿	16C末～1615年	報51	第104図-28
15	SKT181	立会調査	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	概2	第13図-4, p.15
16	SKT202	第1次生活面 SK11	同上	同上	報49	第27図-21
17	SKT202	第2次生活面 SB03	ベトナム焼締長胴壺	16C末～1615年	同上	第38図-16
18	SKT202	同上	同上	同上	同上	第38図-17
19	SKT214	第1次生活面	東南アジア四耳壺	1615年～	概25	第21図-1
20	SKT590	SK1001	東南アジア壺	16C末～1615年	概75	第27図-162
21	SKT214	第3次整地層	同上	16C末～1615年	概25	第26図-4
22	SKT214	第3次生活面 SG01	同上	同上	同上	第32図-47
23	SKT214	第4次生活面 SX13	移動式カマド 東南アジア タイプ	16C後半	同上	第45図
24	SKT214	第6次整地層	ベトナム青磁碗	16C前半	同上	第49図-1
25	SKT214	第6次整地層	ベトナム焼締小鉢	16C前半	概25	第49図-4
26	SKT214	第6次生活面 SX09	東南アジア長胴壺	同上	同上	第53図-3
27	SKT230	第2次焼土層	ベトナム焼締長胴壺・30個 体以上	16C末～1615年	概14	第22図-2
28	SKT230	第2次生活面 SB01	ベトナム土師質広口壺	同上	同上	第25図-7
29	SKT230	同上	ベトナム焼締長胴壺	同上	同上	第28図-1
30	SKT230	同上	同上	同上	同上	第28図-2
31	SKT230	同上	同上	同上	同上	第28図-3
32	SKT230	同上	同上	同上	同上	第28図-4
33	SKT230	同上	同上	同上	同上	第28図-5
34	SKT230	同上	同上	同上	同上	第28図-6
35	SKT241	SR・A-2	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	概8	第38図-28
36	SKT241	SR・A-2	ベトナム焼締短頸壺(棕)	16C末～1615年	同上	第44図-111
37	SKT293	第1層?	ベトナム焼締長胴壺	同上	概56	第5図-37
38	SKT346	SK116	ベトナム鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	概38	第28図-8
39	SKT372	B地区 第1層	ベトナム焼締長胴壺	1615年～	概34	第17図-2
40	SKT372	同上	同上	同上	同上	第17図-3
41	SKT372	第3次焼土層整地層	同上	16C～1615年	同上	第20図-9
42	SKT372	C地区 第1層	ベトナム鉄絵皿(2枚)	1615～1630年	同上	第25図-2
43	SKT372	同上	ベトナム焼締長胴壺	1615年～	同上	第25図-5
44	SKT372	同上	同上	同上	同上	第25図-6
45	SKT372	同上	同上	同上	同上	第25図-7
46	SKT372	第1次生活面 SK64	同上	同上	同上	第27図-1
47	SKT372	C地区 第1次生活面 SK67	同上	同上	同上	第27図-10
48	SKT411	2区 第2次焼土層	同上	16C末～1615年	概41	第27図-162
49	SKT380	機械掘削	鉄絵印判文碗	17C後半～18C前半	未報告	
50	SKT528	F3 -50cm	ベトナム青花輪花皿(2枚)	17C中葉～後半	報71・77	図版18-6, p.27
51	SKT47	第2次生活面 SB04 or SB09	ベトナム青花盤	16C末～1615年	報35	原色図版12・左上
52	SKT200	SS301	ベトナム黒褐釉水注	16C後半(物-15C)	概13	第26図-10

番号	地点番号	層位・遺構	種類	時期	報告書名	挿図
53	SKT202	第1次生活面 SK11	ベトナム焼締長胴壺	17C 中	報 49	第 29 図-2
54	SKT655	第4次整地層	同上一蓋	16C 末	概 77	第 17 図-139
55	SKT655	第1次生活面 SX110	同上一口縁部	1615~	概 77	第 14 図-52
56	SKT655	第4次整地層	同上一底部	16C 後半	概 77	第 17 図-140
57	SKT655	第3次整地層	ベトナム内洪大鉢	1575~1585年	概 77	第 16 図-98
58	SKT655	第3次整地層	ミャンマー白釉盤	1575~1585年前後	概 77	第 16 図-97
59	SKT505	6面畦 泉陽高校	ベトナム長胴壺一蓋	1596~1615年	未報告 実6043	
60	SKT236	第1次焼土層	ベトナム焼締長頸壺	同上	昭和63年度 国庫補助事業	第 13 図-3, p. 11
61	SKT236	同上	ベトナム焼締長胴壺	同上	同上	第 13 図-1, p. 11
62	SKT236	同上	ベトナム褐釉四耳壺	同上	同上	第 13 図-2, p. 11
63	SKT236	同上	ベトナム長頸瓶	同上	同上	第 17 図-6, p. 13
64	SKT182-10	1615年焼土層	短頸壺	同上	概 2	第 17 図-19
65	SKT78-2	B-5 SE018	短頸壺 (四耳壺)	同上		
66	SKT78-2	B-5 第2層焼土	ベトナム焼締長胴壺一口縁	同上		
67	SKT78-2	B-5 第2層焼土	ベトナム内洪鉢	同上		
68	SKT78-2	B-5 第2層焼土	ベトナム焼締長胴壺一口縁	同上		
69	SKT506	1615年面	同上一蓋	同上	大阪府調査	
70	SKT590	第1面 SK1001	ベトナム焼締長胴壺	16C 末~1615年	概 75	第 36 図-164
71	SKT655	SB102 黄色粘土	ベトナム焼締陶器 燭台?	同上	概 77	第 14 図-31
72	SKT590	SK1001	ベトナム焼締長胴壺	同上	概 75	第 36 図-165
73	SKT590	第2層整地層	ベトナム焼締長胴壺	16C 末~1615年	概 75	第 45 図-270
74	SKT590	第1焼土移動層	同上	同上	同上	第 46 図-287
75	SKT590	砂層	同上	17C 前半	同上	第 47 図-304
76	SKT590	同上	同上	同上	同上	第 47 図-305
77	SKT590	同上	同上	同上	同上	第 47 図-306
78	SKT590	壁面	同上	16C 末~1615年?	同上	第 47 図-325
79	SKT702	江戸大土坑	同上	同上?	概 83	第 13 図-57
80	SKT655	第3次整地層	東南アジア陶器壺?	同上	概 77	第 16 図-96
81	SKT655	第3次整地層	ベトナム焼締長胴壺	16C 末~1615年	同上	第 16 図-95
82	SKT234	第2遺構面 SK70	ベトナム焼締長胴壺	16C 末~1615年	〔堺〕堺・柳之 町遺跡調査会 (大手前女子 学園考古資料 室・1989)	
83	SKT241		ベトナム灰釉水注		概 8	第 48 図-157
84	SKT241		ベトナム碗			

『河盛家世界地図屏風』(右側)

日本長崎 異国湊口迄船路積、為三十六町一里

南京 三百里

此国ヨリ白糸りんすちりめん紗綾段子色々巻物染付皿碗・  
ついしゆくりく花入・万手之<sup>能</sup>物并葉種書籍出日本

銅葉鐘水風<sup>呂</sup>渡也

大明国内

福州 五百里

此国南京同前毛毯水銀出  
右福州同前ひろうと白砂糖黒糖皿茶碗手之惡物出

漳州 六百里

此国南蛮人為商売船繫嶋を借住宅大明国の物日本買來又  
我国買渡日本買來物 印子白糸段子紗綾縮綿りんす

天川<sup>マカオの川</sup>

〔志ゆ〕ちん紅糸白まかひ糸毛毯白黒之木綿天鵝賊万巻之類  
鮫水銀とたん針圍出光明朱 葉種麝香白黒赤<sup>熊</sup>染付皿茶  
碗白砂糖密漬之類其外南蛮国之物天竺<sup>熊</sup>之物持來 日本

万器物銅道具時絵之物屏風 疊縫箔染小袖渡

此国北ノ端たんついと云所呂宋南蛮人住宅<sup>南ノ方</sup>たい

わんと云湊ニ日本人商売渡お らんたも住宅大明近故糸

巻物之類此所ニ而おらんた買集故天竺南蛮物も有

之地有之物者鹿皮也日本<sup>熊</sup>銅鉄葉鐘渡但地之 者八余不

買取大明人売也

此国南蛮人城取住大明人も城下為商売住宅大明ノ糸巻

物并南蛮物らしや狸々皮 者阿<sup>かの地</sup>の地之者ハ鹿皮蘇木白砂

糖黒砂糖水牛ノ角藤他国物蒲萄酒珊瑚色々渡<sup>日本</sup>日本ヨリ小

麦ノ粉銅鉄葉鐘時絵、類 扇子紙帷子葉鐘水風呂小刀は

さミ万器物食物之類渡

はかしな 此国にも南蛮人住宅商売物まんゑいら同前

か、やん 此国はかしな同前

(左側)

東京

安南国内

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

占城

此国ヨリ黄北絹ほうあやりんすば袖肉桂鬱金・□砂出日本

銅鉄錢硫黄葉鐘水風 呂扇子からかさ鏡万器物渡ス

此国ヨリ黄糸北絹いづめ沈伽羅鮫黒砂糖蜜胡椒金出日本

銅鉄錢万器物 葉鐘水風呂帷子木綿布子からかさ扇子

渡ス此国ヨリ伽羅鮫出日本ヨリ万商買物少渡ス小国故商買物少

此国ヨリ鹿皮 象牙蠟蜜黒砂糖藤水牛ノ角さいかく撫櫛

子大風子胡舛うこん 鮫孔雀尾はんや出日本<sup>熊</sup>銅鉄硫黄

せう<sup>熊</sup>のふ万器物扇子からかさ葉鐘渡

此国ヨリ蘇木鹿皮圍皮象牙柄鮫水牛ノ角錫鉛りうのふきり

んけつさらさ木綿嶋ノ類藤珊瑚出日本ヨリ屏風墨其外かほ

しや同前

此国ヨリ胡舛鮫象牙出

此国南蛮人舟繫之ため住宅少之嶋崎や錫鮫にくづく羽

織袴用嶋之類出

此国まらか同前阿せん屋へ木香志たん阿たんとすはあさ

と云蒲萄酒木綿嶋之類出

此国ヨリりうのふ白壇出日本<sup>熊</sup>鉄を渡ス

此国ヨリ丁子出おらんと南蛮人城を取住宅年々責合て

合戦

此国之内三十里四方計おらんと志かたへ城を取国々江之

手遣を亦国々江之物を買方々江渡此国にハ商売物なし

此両所ヨリ狸々紅らしやは阿のらせいたへるさいほらん

しや阿るミさいえけたますこらんにや万毛織ひいとろ

の類蒲萄酒出<sup>ネーデルランド</sup>ふるんさといひ国内也

資料5 堺環濠都市遺跡における東南アジア陶磁器出土の屋敷地規模

地点名	年代	出土層位・遺構	種類・器種・数	使用法	屋敷地 間口×奥行 ※1間=6尺5寸=195cm	茶の湯関係共伴遺物等
SKT39	1596~1615年	SB301 礎石建物	タイノイ川窯系短頸壺	水指	2間×6間(?)	炉壇・茶臼出土
SKT47	1596~1615年	SB04 博列建物	タイノイ川窯系四耳壺	茶壺	5間(?)×10間以上	茶臼・茶入・茶壺出土
同上	同上	SB09 博列建物	ベトナム白磁碗	茶碗	3間×7間(?)	斗々屋茶碗出土
SKT200	1553年大火~ 1575年大火	SB301 第3次 面礎石建物	ベトナム茶褐釉水滴	水滴・茶 入	2間(?)×6間	
SKT202	1596~1615年	第2次生活面 SK16・SB07 近く	タイノイ川窯系四耳壺	不明・硫 黄(?)	2間×6間	礎石建物 唐津水指・美濃 伊賀水指
同上	1575~1596年	第3次生活面 SK28・礎石 建物近く	タイノイ川窯系四耳壺 (2個体)	硫黄	同上	
同上	17世紀後半~ 18世紀初頭	第1次生活面 SK11	タイノイ川窯系四耳壺 ベトナム印判文碗 ベトナム繩簾文長胴壺	不明	元禄2年(1689)堺大絵岡 山口屋宋閣7-2-016地点・ 7間×16間 糸割符商人 山口屋庄右衛門7-8-017地 点・17.5間×16間 糸割 符商人	
同上	1596~1615年	第2次生活面 SB03	ベトナム長胴壺(2個体)	切溜花生	1.5間×7間(?)	志野長石釉茶碗・織部黒香 茶碗
同上	1596~1615年	第2次生活面 SB05	ベトナム長胴壺 タイノイ川窯系四耳壺	水指 茶壺	2間×6間 SK16の礎石建 物と同一屋敷地	美濃茶入・唐津蓋
SKT214	1596~1615年	第3次焼土層	同上	不明	2間×不明—調査区内—	斗々屋茶碗・信楽茶壺・唐 津建水・軟質施釉陶灰匙
同上	同上	第3次生活面 SG01(土坑)	ベトナム長胴壺	不明	同上	彫三島茶碗・茶入・青織部 角向付・絵唐津沓茶碗
同上	15世紀後半~ 16世紀前半	第6次生活面 SD03	タイアユクヤ窯系土師 質壺	不明	礎石建物 2間(?)	美濃天目茶碗
SKT230	1596~1615年	第2次焼土層	ベトナム繩簾文長胴壺・ ベトナム広口四耳壺	不明	1.5間×7間(?)—調査区 内—	景德鎮窯系青花香合
同上	1596~1615年	第2次焼土層 SB01博列建物	ベトナム土師質広口壺 ベトナム長胴壺	建水 切溜花入	1.5間×7間(?)	唐津沓茶碗・備前掛花生・ 炉壇・懷石料理用食器
同上	15世紀第4四 半期~16世紀 第1四半期	第5次生活面 SB14	タイノイ川窯系四耳壺	不明	2間×2間以上	
SKT368	1596~1615年	第2層出土	東南アジア土師質壺	不明	2間×2間(建物)—調査区内—	
SKT590	1596~1615年	第2面 SK1001	タイノイ川窯系四耳壺 ベトナム長胴壺(2個体)	不明	2間×3間以上(炉壇出土 —茶室)の北隣土坑	朝鮮王朝茶碗
同上	同上	第2面 第1 焼土層	ベトナム長胴壺	不明	2間×3間以上の茶室—調 査区内にあり—	絵唐津沓茶碗
SKT573	同上	第1次焼土	タイノイ川窯系四耳壺	不明	2間×5間以上、2間×4 間以上、1.5間×3間以上 の屋敷地あり	
SKT655	同上	0	ベトナム長胴壺	不明	2間×?	
同上	1575~1585年 前後	第3次整地層	ミャンマー白釉碗 ベトナム内洪大鉢	不明 水指	3間×2間以上、2間×3間 以上、3間×5間以上の近 くで出土	備前双耳水指・瀬戸美濃窯 系開香炉・斗々屋ノ蕎麦茶 碗・備前建水
同上	1553年大火~ 1575年大火	第4次整地層	タイノイ川窯系四耳壺 ベトナム長胴壺と蓋	不明	4.5間×2間以上	蕎麦茶碗



資料6 湯築城跡2段階（16世紀前半～中葉）の区画別（屋敷地）遺物出土状況一覧  
 （茶の湯道具出土状況）—報告書による—

出土遺物の種類		区画 区画2 SB203	区画3 SB204	区画6 SB208	区画7
中国陶磁器供膳具	青磁碗	●●●●●●●●●●●●●● (11)	●●(2)	●●●(3)	●●●●●●●●●● (8)
	青磁皿	●●●●●●●●(6)	●(1)	●●●●●●(5)	●●●●●●●●●● (8)
	白磁碗	●●●(3)		●(1)	●(1)
	白磁皿	●●●●●●●●●●●●●● (15)	●●●●●●●●(5)	●●●(3)	●●●●●●●●●●(7)
	白磁坏	●●●●(4)	●●●●(4)		●(1)
	青花碗	●●●●●●●●(6)	●●●●●●●●(5)	●●●●●●●●(5)	●●●●●●(4)
	青花皿	●●●●●●●●●●●●●● (10)	●●●●●●●●●●●●●● (12)	●●●●●●●●●●(7)	●●●●●●●●●●●●●● (18)
	五彩皿	●(1)	●●●●●●●●(6)		
貯蔵具(大)	備前焼大甕	●●●●●●●●●●●●●● (8)	●●●●●●●●●●●●●● (10)	●●●●●●●●●●(7)	●●●●(3)
貯蔵具(中・小)	類亀山焼甕	●(1)		●(1)	
	備前焼甕	●(1)	●●●(3)	●●(2)	●(1)
	備前焼壺	●●●●●●●●●●●●●● (13)	●(1)	●●●●●●●●●●(7)	●●(2)
	中国茶壺▲	●●(2)	●●●(3)		●●●●(4)
	朝鮮王朝陶磁德利▲	●●(2)			●●(2)
	タイノイ川窯系四耳壺▲				●●●(3)
煮炊・調理具	土師質釜・鍋	●(1)	●●(2)	●●(2)	●●●●●●(5)
	備前焼播鉢	●●●●●●●●(6)	●●(2)	●●●●●●(5)	●●●●●●●●(6)
	土師質播鉢	●(1)			
石臼	粉挽き臼	○			
	茶臼▲	○	○	○	
砥石	砥臼	○	○	○	○
文房具	硯	●●●●●●●●●●(7)	●●(2)	●●●●●●(4)	●●(2)
武器・武具	刀装具・鉄鎌・小札など	●●●●●●●●(6)	●●(2)	●(1)	●●(2)
奢侈品・珍品	青磁聞香炉▲	●●(2)		●●(2)	●(1)
	青磁大型品他	鉢・壺・水滴?	壺		盤
	白磁		壺?・合子?		
	青花	鉢	鉢		大皿
	瀬戸・美濃系窯天目茶碗▲	●(1)		●(1)	
	その他	人形・茶釜・茶用風炉▲			

▲が茶の湯関係品 ※森村が一部改変した。

資料7 近世茶の湯スタイルの確立過程

種類	一乗谷朝倉氏遺跡	長浜城下町	堺環濠都市遺跡 SKT19-SF01	堺環濠都市遺跡 SKT655	堺環濠都市遺跡番号	
茶室(礎石・埦列建物)	○	○	×	SKT655-SB301・306・308・311	SKT39-SB301・SB302, SKT147-SB04, SKT230-SB01, SKT655-SB102とその南側	
茶室の壁土	×	×	×	×	SKT47-SB04, SKT60	
庭	○	○	×	×	SKT47-SB04	
躰	×	×	×	×	SKT57	
炉壇	×	×	×	×	SKT230-SB01, SKT39-SB302, SKT336-SB02, SKT655-第1次遺構面, SKT289-SB02	
茶釜	×	×	×	×	SKT39-SB301, SKT72, SKT655-SK109	
茶臼	×	×	×	×	SKT39-SB302, SKT57, SKT173-SK11(3), SKT6	
灰匙	×	○ 軟質施釉陶器	×	SKT655-SB308 軟質施釉陶器	SKT214, SKT57(3)	
灰器	×	×○?	○?	×	SKT39-SB301	
柄杓	×	×	○	×		
自在鉤	×	×	×	×	SKT203-SB01	
五徳	×	×	×	×	SKT39-SB301	
茶たんす鍵	○	×	×	×	SKT39-SB301, SKT200-SS201	
水指	○	○	○ 備前	SKT655-第3次整地層 備前	SKT39-SB301, SKT448-2-SB04, SKT6	
建水	○	○	○ 備前	×	SKT230-SB01, SKT39-SB301	
蓋置	×	×	○ 鉄製五徳	×	SKT369-2-SX4114 (朝鮮王朝)	
瓦燈	×	×	灯明皿(白磁)	×	SKT39-SB302	
間香炉	○	○	3点	SKT655-第3次整地層 瀬戸美濃灰釉	SKT47-SB04, SKT39-SB302, SKT57, SKT344, SKT200	
香合	○	○	×	×	SKT200-SB201, SKT60-第2層	
茶碗	○	○	○	SKT655-SB305 朝鮮王朝(3)	SKT39-SB301	
夏茶碗	×	×	○ 朝鮮王朝白磁	×	SKT181-2, SKT60, SKT735, SKT230-SB01	
茶入	○	×	○ 3点	×	SKT39-SB301, SKT47-SB04, SKT3	
茶壺	○	○	○	SKT655-第3次整地層	SKT47-SB01, SKT39-SB302	
硯	○	○	○ 水滴	×	SKT368-SS202, SKT3, SKT75, SKT230-SB01(2)	
花入	○	○	○ 備前	×	SKT39-SB302掛花生, SKT448-2, SKT230-SB01切溜・SB04一輪挿し	
香炉	○	○	×	×	SKT39-SB302	
沓茶碗	×	×	×	×	SKT39-SB301, SKT57, SKT82, SKT230-SB01	
茶陶アンティーク物	○	○	○ 青磁綾花皿	SKT655-第3次整地層 青磁碗	SKT47-SB04, SKT39-SB301, SKT200-SB201, SKT84-SB01	
懐石料理 ※環・碗・皿・ 向付は組物	飯碗	×	○	○ 青花・漆器	SKT655-SB306	SKT39-SB302, SKT368-SS202
	皿	×	○	○	SKT655-SB301	SKT39-SB301, SKT47-SB04
	向付	×	×	○ 唐津	×	SKT39-SB301, SKT48-2-SB01・04, SKT368-SS02
	鉢	○	○ 備前	○ 備前	×	SKT47-SB04
	盤	×	○ 漳州窯	○ 漳州窯	SKT655-第3次整地層 ミャンマー	SKT448-2-SB04
	焼塩壺	×	×	○	SKT655-第3次整地層	SKT39-SB301, SKT230-SB01
	片口	×	×	×	×	SKT39-SB302, SKT6
	徳利	○	○	○ 備前	×	SKT39-SB301
	坏	○	○	○	×	SKT39-SB301, SKT368-SS202
	振出	×	×	×	×	SKT39-SB301, SKT573
	汁注	×	×	○ 備前	×	SKT448-2-SB01
	湯桶	×	×	○ 備前	×	SKT39-SB302
	搦鉢	○	○	○ 丹波・備前	SKT655-第3次整地層	SKT448-2-SB04, SKT39-SB301
箸置耳皿	×	×	×	×	SKT448-2-SB01, SKT230-SB01	
年代	1573年焼亡	1586年地震面	1585~1600年前後	1596~1615年大坂夏の陣大火面	同左	
画期	中世茶の湯スタイル	近世茶の湯スタイルの萌芽期	近世茶の湯スタイルの発展期	近世茶の湯スタイルの確立期	同左	
歴史的画期	織田期 1560~1582年	豊臣I期 1582~1590年	豊臣II期 1590~1598年	家康期 1598~1615年	同左	

茶の湯スタイル ①茶室とその空間 ②茶をひく ③花を生ける ④書をする ⑤香を聞く ⑥茶を点てる ⑦懐石料理を食べる

---

**The History of Ceramics in Japanese Culture from the Standpoint of Southeast Asian Ceramics from the Fifteenth Century to the Seventeenth Century:  
Centering on Artifacts from Sakai Kango-toshi Relics**

MORIMURA Ken-ichi

Recent excavation researches are about to clarify the kilns used for the production of Southeast Asian ceramics.

The chronological perspective is according to the following standards: the remains of Shuri Castle (destroyed by the conflagration in 1459); remains of the castle town of the medieval Otomo Castle (destroyed by the conflagration due to the invasion of the Shimazu Clan in 1586); the San Diego of the Philippines, a ship (sunken on December 14, 1600); and the Witte Leeuw, a ship (sunken in 1613).

For Southeast Asian ceramics were used as containers for imported products, there are the following theories: that the four-ear pots of the Mae Nam Noi Pottery type in Thailand were used for fragrant-flower liquor; that they were used for saltpeter; and that the long pots of My Xuyen Pottery of Vietnam were used for sugar container.

It is certain that those Southeast Asian ceramics used as containers were diverted after they were imported. Among them, the most important thing is that they were used for tea ceremony, the integrated art of Japanese culture.

*Chato*, (茶陶 tea ceramics), known by the names of *nanban*, *chatsubo*, *kiridame-hanaire*, *mekirikensui*, *chimaki*, and *uchishibu-mizusashi*, were excavated in Sakai in a lump from the tea-ceremony room and others of the period from the latter half of the sixteenth century to the 1615 Conflagration.

Some Southeast Asian ceramics were imported for tea ceremony from the first. Underglaze Iron Kōgo (鉄絵香合) of the Si Satchanalai Pottery type in Thailand, which used to be called “Sunkoroku (宋胡録),” and bowls of Vietnamese white porcelain.

The tableware for daily use combined with the ware for guests, the ceremonial ware combined with ordinary ware, and the tea ceramics involved in the tea ceremony combined with a set for *kaiseki-ryori* (懐石料理 teaceremony Japanese dishes), contributed to the establishment of early-modern ceramics. Each tea ceramic was made different, clearly reflecting individual choice and style. As the system of tea ceramics was established, tea ceramics varied and expanded in kind, type, and quantity. The fact they were excavated together with tableware for daily use

suggests that there was an explosive increase during the period from the latter half of the sixteenth century to early seventeenth century. The trade with Southeast Asia characterizes this period of time, and Southeast Asian ceramics are related to the establishment process of the early-modern tea ceremony. Those who actually traded them were the city people who belonged to the middle economic class. It is no exaggeration to say that their manner of "treating" guests as an economic expert by using the tea ceremony, and the "status" or the "personal style" as *chajin* (茶人 a master of *Cha-no-yu*) has established the system of the early-modern tea ceremony as well as early-modern ceramics.

Aspects of early-modern ceramics

1) Generalization of tea ceramics 2) Establishment of the nationwide distribution system  
3) Multiple kinds and styles 4) Potteries for mass production and those for multinational production  
5) Increased in volume 6) Antiques 7) Selected by individual style → each article was made different  
8) Custom-made production to order from *chajin* 9) The set of ware

Signs of the early-modern ceramics were already apparent around 1585, and it was established between 1598 and 1615, in other words, during the period of a governmental vacuum in Japan. Besides, Southeast Asian ceramics would also serve as important archaeological materials to clarify the transition of the trade system during the period from fifteenth to seventeenth centuries.